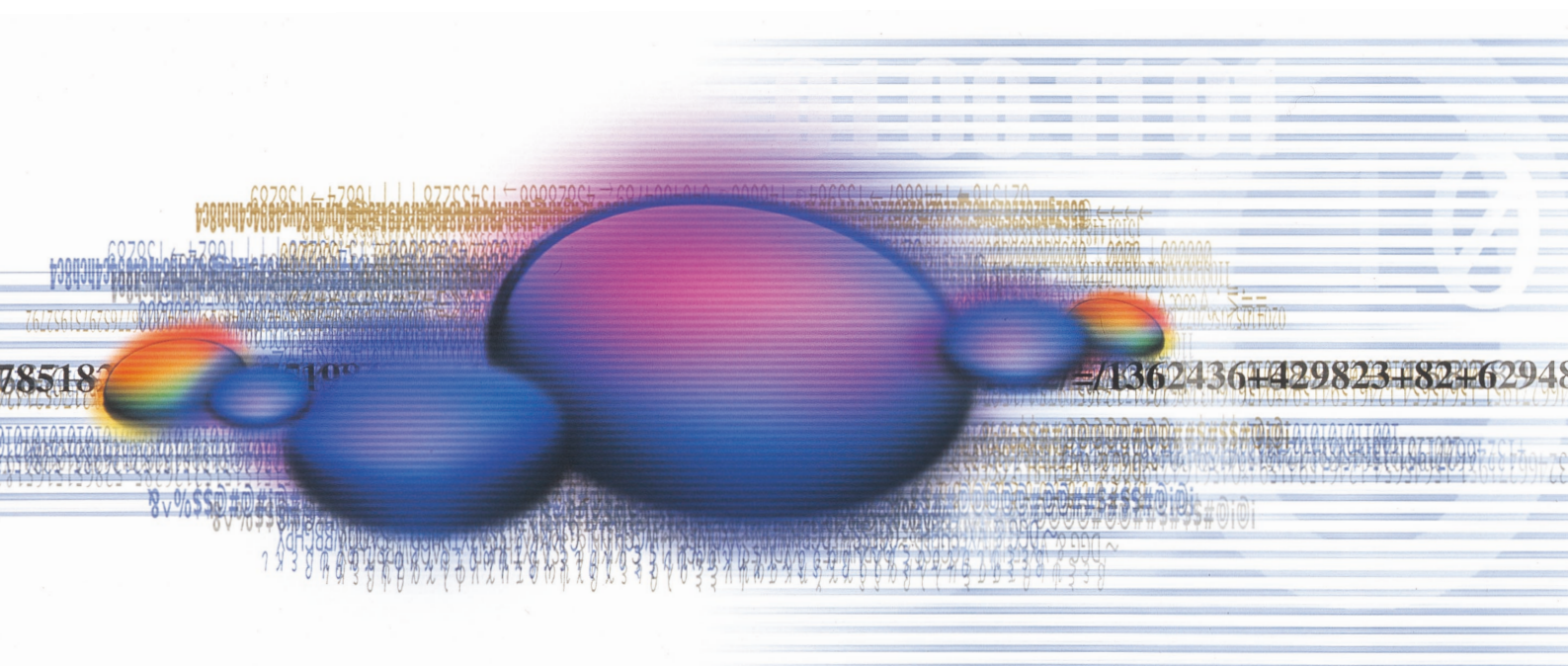


文部科学省

国立情報学研究所

平成14年度 要覧

2002



National Institute of Informatics

NII

C O N T E N T S

1	はじめに	1
	国立情報学研究所の特色	2
4	国立情報学研究所における研究について	
	情報の基礎に関する研究	4
	通信ネットワークに関する研究	5
	ソフトウェアに関する研究	6
	音響・画像情報の研究	7
	知的システムの研究	8
	人間と情報の関連の研究	9
	研究活動の研究	10
	大学院教育	11
	実証研究センター	12
	情報学資源研究センター	13
	研究協力／国際交流	14
	研究成果の普及	15
16	国立情報学研究所における開発・事業について	
	国立情報学研究所における開発・事業について	16
	GeNii (NII学術コンテンツ・ポータル)	17
	学術情報ネットワーク	18
	目録所在情報サービス	20
	情報検索サービス	22
	オンライン学術用語集	23
	学協会情報発信サービス	23
	電子図書館サービス	24
	国際事業の展開	25
	研修事業	26
27	評議員・運営協議員・参与・名誉教授	27
	組織／予算・定員	28
	施設	30
32	沿革	32
	問い合わせ先	33

はじめに



国立情報学研究所は、情報学に関する総合的研究と学術情報の流通のための先端的な基盤の開拓と運用を行うことを目的とした、文部科学省の大学共同利用機関です。

「情報学」は、情報に関する広範な研究領域に総合的に関わるものであり、情報科学・工学のみならず自然科学から人文・社会科学までを幅広く横断する超領域的なものです。本研究所では、この「情報学」の構築のために、情報基礎、情報システムの基盤、ソフトウェア、多様な情報メディア、知能処理、学術研究における情報活用、そして情報が社会との関わりを強める方策など、7つの柱を中心に広範な領域に関わる総合的な研究を行っています。同時に、その研究成果を実証的に開発し、先端的な学術情報システムを形成し、運用するという事業を展開しています。このように、研究と事業を車の両輪のように連携させ、根源的な学術研究を推進することが、本研究所の大きな特徴の一つです。

さらに、この情報学の新分野の高度の専門的職業人として、情報社会を担う人材の育成を目指し、総合研究大学院大学の数物科学研究科に情報学専攻博士課程(後期)を創設し、平成14年度から、研究者、専門家、社会人等を受け入れて、教育・指導を行っています。さらに今年の秋から国際コースを新設して留学生を受け入れる予定です。

国立情報学研究所が創設された平成12年は、

情報通信技術が世界的に大きな注目を集めた年でした。この年に開催された九州・沖縄サミットでは「グローバルな情報社会に関する沖縄憲章」が採択され、21世紀が「情報の世紀」と位置付けられました。さらに、平成12年に高度情報通信ネットワーク社会形成基本法(IT基本法)が制定され、平成13年にe-Japan戦略が策定されました。これを受けて、文部科学省では全光技術を用いた次世代インターネットとして世界最高速の10Gbpsの学術情報ネットワーク(スーパーSINET)を国内に設置することとし、本研究所はその開拓と運用を行っています。このように、情報通信技術の進歩により、地球規模の発展の可能性が期待される一方で、情報格差(デジタル・デバイド)の拡大、セキュリティの確保など新たな課題も生み出されています。

こうした背景の下、国立情報学研究所が担うべき役割は、ますます重要になっております。本研究所で行われた「情報学」に関する研究成果が広く社会に還元され、学術や科学技術のみならず、産業・経済の発展、ひいては国民生活や文化の向上に貢献するものとなるよう、努力を積み重ねてまいりたいと考えております。皆様方の一層のご支援とご鞭撻をお願いいたします。

平成14年7月

国立情報学研究所長 末松 安晴

研究と事業とを車の両輪として、総合的に

国立情報学研究所は、情報学に関する総合研究に加え、学術情報の流通のための先端的な基盤の開発と整備を行う大学共同利用機関として、平成12年4月に設置されました。国立情報学研究所では、長期的な展望の下に、ネットワーク、ソフトウェア、マルチメディアなどの情報関連分野の基礎から応用までの研究開発を幅広くカバーするとともに、全国の大学はもとより国立研究機関や民間企業の研究所との連携・協力を重視し、情報学研究を総合的に進めることを目指しています。

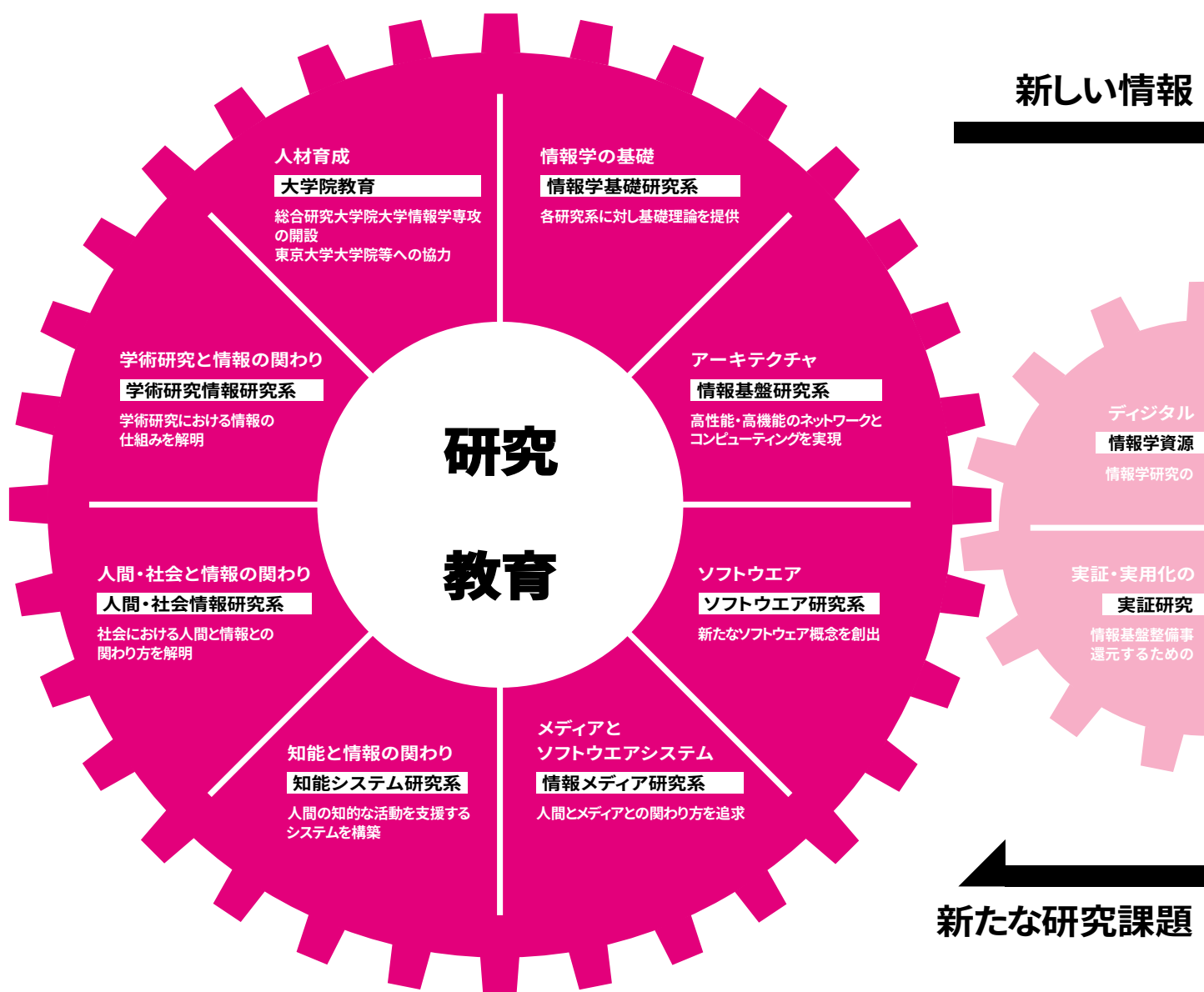
基礎から応用までの総合的研究

情報分野において学術性の高い研究を自然科学から人文・社会科学まで広範かつ長期的に発展させ、基礎から応用にわたり、理論から実用化に至る研究を一体として行っています。

学際性の追求

研究領域間の連携による横断的研究や幅広い学問分野の相互作用による学際的研究を推進することにより、学術研究の高度化・総合化のために有効な手段を提供し、学問全般の発展に寄与しています。

新しい情報



国立情報学研究所の研究活動

国立情報学研究所が対象とする「情報学」は、計算機科学や情報工学だけでなく、人文・社会科学や生命科学の領域も包含する新しい学問分野です。国立情報学研究所では、7研究系35部門及び2研究施設8室を設置し、基礎から応用までの総合的研究、学際性の追求、産学官の連携、国際的な研究活動を指向した情報学研究を総合的に進めています。

推進します

産学官の連携

大学、国立試験研究機関及び民間研究機関との間の緊密な連携を図り、我が国における情報学の飛躍的發展を目指します。また、これらの機関と協力してプロジェクト型共同研究を実施し、研究成果の社会における活用を促進しています。

国際的な研究活動

諸外国との研究者交流を積極に行い、国際共同研究を積極的に実施することにより、国際社会への発信に努めています。また、国際的標準化活動にも貢献しています。

学術情報基盤整備の推進

学術情報ネットワークの構築・運用、大学図書館等の所蔵する図書・雑誌の総目録の作成、学術情報データベースの形成・提供や大学図書館職員に対する教育・研修等の事業を通じて、我が国の学術情報基盤整備において重要な役割を果たしています。

高度な専門家（研究者・技術者）の養成

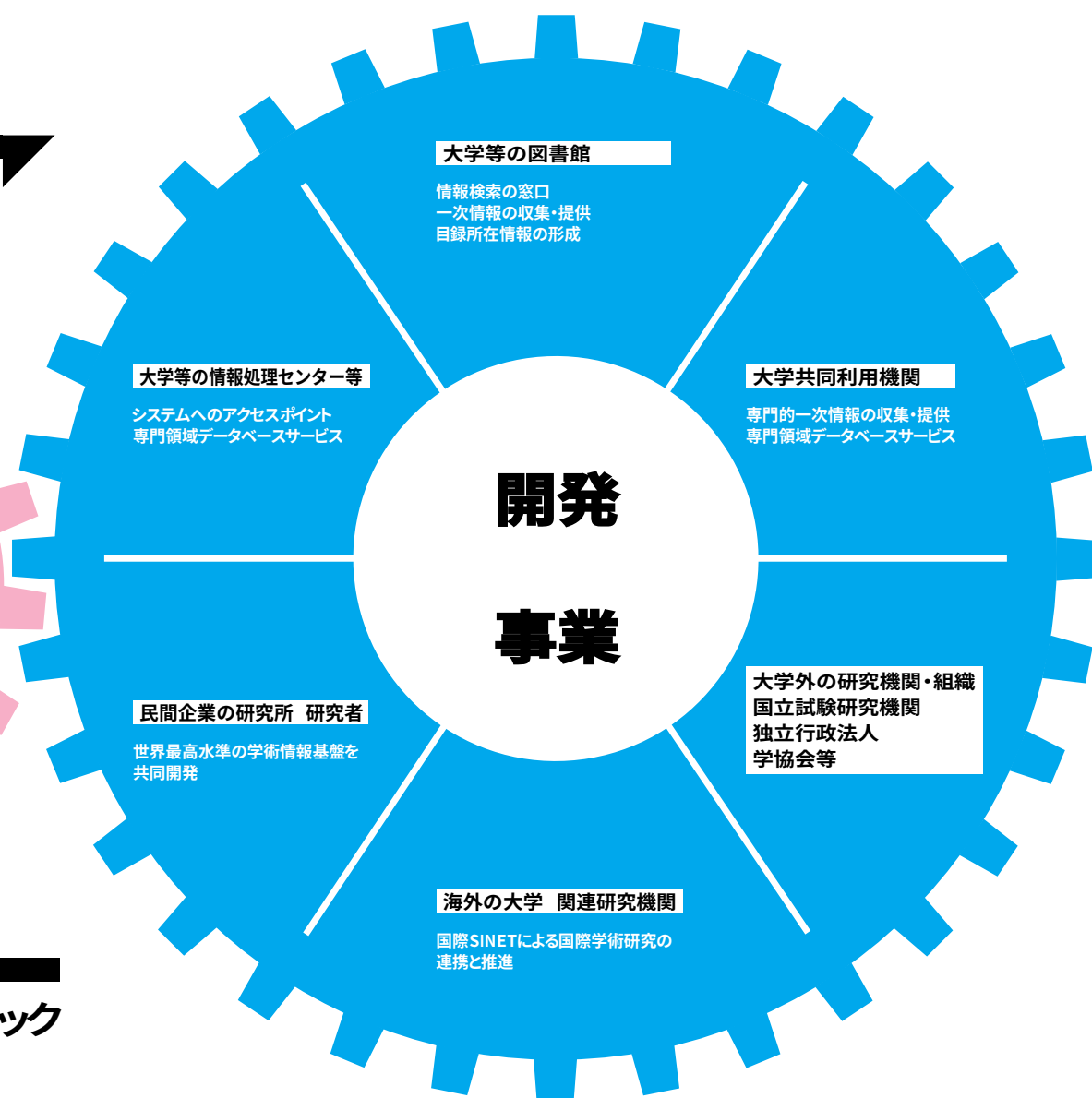
総合研究大学院大学の基盤機関として情報学専攻を開設し、先端の情報学の素養を身につけ、広い視野と高度な専門知識を持つ研究者や技術者を養成します。

技術の提供

コンテンツ
研究センター
ための資源整備

ための共同研究
センター
業や社会に
実証研究の推進

のフィードバック



国立情報学研究所における開発・事業

国立情報学研究所では、学術情報基盤の構築・運用、大学図書館や学協会等との連携・協力、システム開発とその運用に関連する業務を行う開発・事業部を置き、研究組織との密接な連携・協力の下に、研究者が学術情報基盤の整備に参画できる組織・体制を構築し、得られた研究成果を実証的に適用・実用化することにより、我が国の学術情報基盤の整備・強化に貢献します。

情報の基礎に関する研究

ヒトを特徴づける遺伝子の地図とデータベースを作ろうとしています

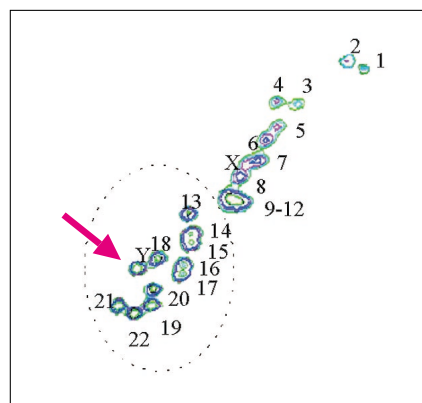


藤山秋佐夫 教授

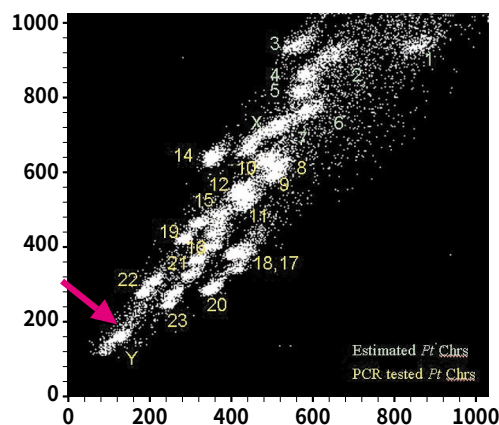
ワトソンとクリックによってDNAの二重鎖構造が報告されてから50年目に当たる2003年春、いよいよヒトの全ゲノム構造が決められる見通しが高まってきました。30億文字に相当する膨大な遺伝情報の宝庫です。しかし、ヒトのDNA配列だけを見ていたのでは、どの部分がヒトを特徴づける特異的構造なのかを明らかにするのは、かなり困難です。そのための有力な手段となるのが比較ゲノム解析という手法です。例えば、同じ哺乳類でもヒトとは遠縁の、マウスのゲノム配列との比較を行うことにより、哺乳類に共通に保たれている基本的なゲノム構成が明らかになるでしょう。比較的大きなものの間の共通点を探すという考え方です。一方、この逆の考え方に基づく研究もあります。ヒトにもっとも近縁なチンパンジーのゲノム構造との比較ゲノム解析を行って両者の間で異なる部分を見つければ、その部分がヒトゲノムを特徴づける構造情報を含む候補になるはずです。私たちの研究では、まずヒトゲノムを基準に数種類のゲノム間の全体的な比較を行い、保存性の高い領域と低い領域の全体的な分布についての検討を進めています。

まずヒトと進化的に数百万年離れているチンパンジーのゲノムを解析対象に選びました。右図からもわかるように、ヒトとチンパンジーのゲノムの構成はかなりよく似ています。このうち約2%に相当する領域のDNA配列を正確に比較したところ、ヒトとチンパンジーとの違いが1.27%であることが分かりました。さらに、このような違いを持つ領域がゲノム内に均一に分布しているのではなく、偏りを持って存在していることを示すデータも得られています。これらを正確にゲノム上で位置づけ、内容を明らかにすることが今後の課題です。

■ ヒトの男性



■ チンパンジー（オス）



上の二つの図は、セルソーターという特殊な装置を用いて分離した、ヒト(上側)とチンパンジーの染色体の様子を示しています。細部で違いはあるものの、全体的にはとてもよく似ていることが分かります。矢印で示したのは、雄性

を決定づけるY染色体の位置を示していますが、この染色体については、例外的にヒトとチンパンジーで大きさがずいぶん異なることがわかります。

情報学基礎研究系

計算理論、アルゴリズム論、数値解析、人工知能、認知科学、生命情報科学など様々な視点から、情報についての基礎的な研究を多面的かつ総合的に進め、情報学の基本的な概念や理論を作り上げることを目指します。さらに、これらの概念や理論を実現し、応用するための方法論や実装法についても研究します。

- アルゴリズム基礎研究部門 ●情報数理研究部門 ●記号科学研究部門 ●認知科学研究部門 ●量子コンピューティング研究部門
- 計算理論研究部門(流動研究部門) ●生命情報科学研究部門(客員研究部門)

通信ネットワークに関する研究

コンピュータネットワークでの通信品質保証を研究しています



計字生 助教授

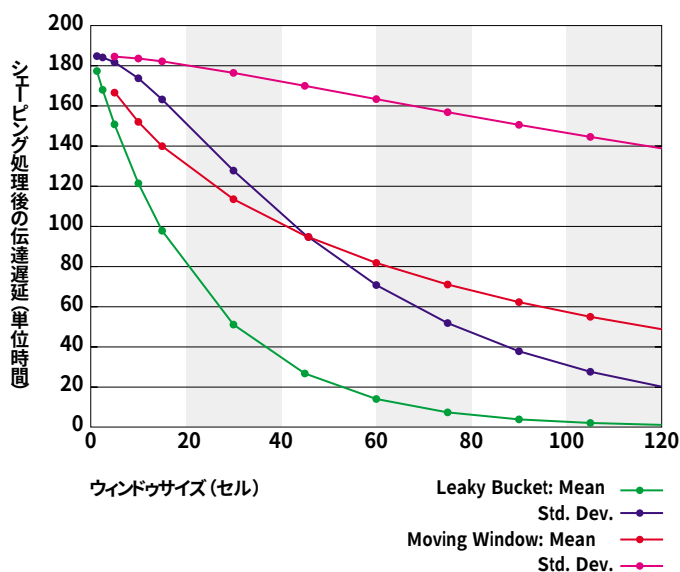
高速通信ネットワークのトラフィック制御研究

スーパーSINETのような各種の通信サービスが利用できる高速ネットワークが広く使われるようになってきましたが、その能力を生かすためには、アプリケーションごとに遅延や遅延の揺らぎ、損失(伝送中のデータ消失)などの品質を保証する手法の開発が不可欠です。その研究をしています。

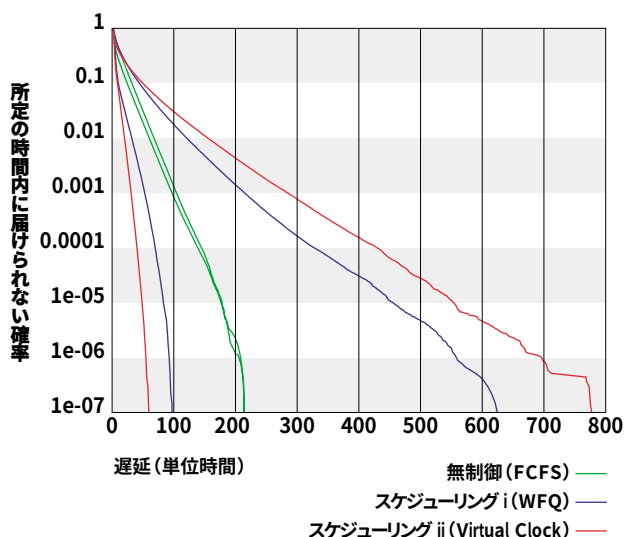
通信量が増加したときネットワークの伝送遅延特性を大幅に悪化させないような制御として、トラフィックの流量規制やトラフィックの変動の度合の制御を行うシェーピングと呼ばれる方法があります。上手に使用すると実効的なネットワーク容量を増加させることができます。

しかしネットワーク全体の性能を保つために、個々の通信の品質が低下するという点では困ります。ネットワークにはファイル転送のような、細かな遅延時間より長時間を通じての絶対的な通信容量を保証してほしい通信もあり、またインターネット電話のような、容量より個々の遅延の保証が鍵となる通信もあります。このような応用ごとの特性に着目して、通信間の資源の競合を解決する、スケジューリングも重要です。新しいスケジューリングアルゴリズムを提案し、その評価を行っています。

■ 図A



■ 図B



図Aは典型的なバーストラフィックについて、異なる方式のシェーピングを行った場合生じる遅延および遅延のばらつきとトラフィックの変動の度合を制御するシェーピングパラメータの関係を示しています。トラフィック制御によって、トラフィックの特性や伝送に品質にもさまざまな影響を与えることができます。

図Bは各種のスケジューリング方式により、伝送遅延を優先する場合と容量を優先する場合の2種類のトラフィックの遅延特性を示しています。制御を行わない場合は、どのトラフィックも同じような遅延特性を示します。Weighted Fair Queueingと呼ばれるスケジューリング方式で制御すると遅延時間の要求の厳しい通信とそうでないものは区別され、それぞれ異なる遅延特性が得られています。しかし、制御の方法が適当でないと資源の公平な配分が行われなくなります。図中のVirtual Clock方式はWFQと異なった制御が行われた例です。

情報基盤研究系

情報技術の基盤的な要素である計算機システムと計算機ネットワークの実現法について研究します。最先端の研究活動を通して、従来の計算機では実現できなかった複雑な情報処理を可能にする高性能な計算機システムの開発や、情報を円滑かつ安全に流通する高機能な計算機ネットワークの構築を行い、情報社会を支える情報基盤の新しい姿を追求します。

- 計算機アーキテクチャ研究部門
- ネットワークアーキテクチャ研究部門
- 高性能ネットワーク研究部門
- 情報流通基盤研究部門
- 暗号情報研究部門
- ネットワークセキュリティ研究部門(客員研究部門)

ソフトウェアに関する研究

国産オペレーティングシステムの発信を目指しています



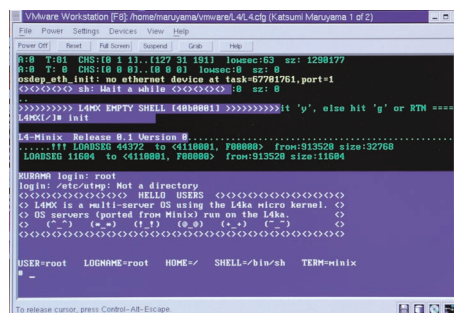
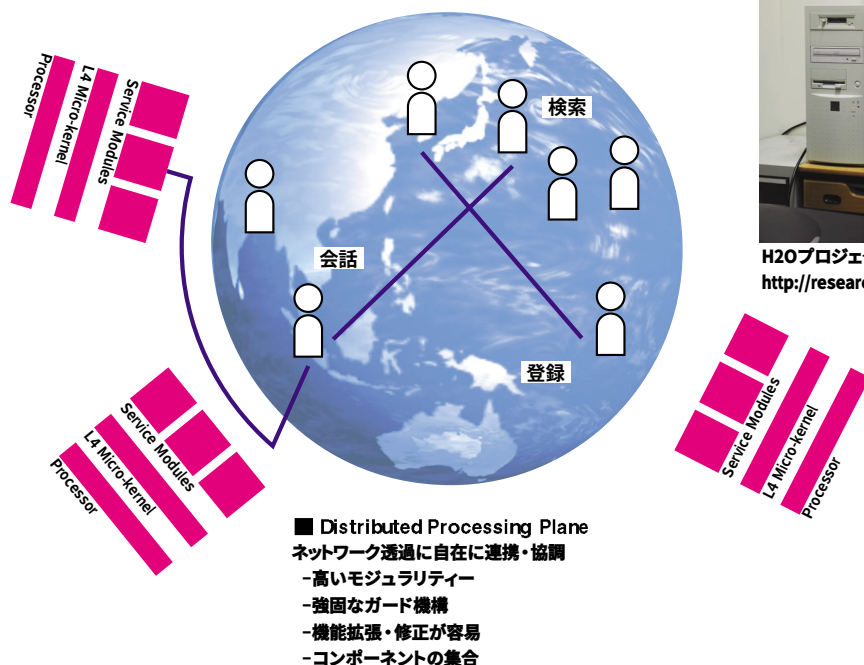
左から児玉和也 助手、日高宗一郎 助手、丸山勝巳 教授、橋爪宏達 教授

広域協調処理プラットフォームの研究

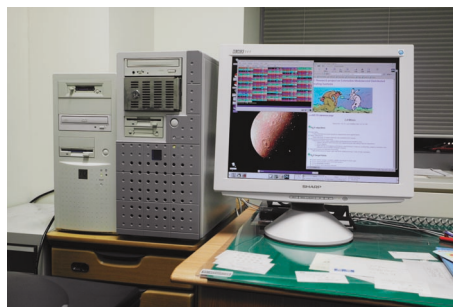
制御・管理システム、組込みシステム等の分野では膨大なソフトウェア開発が要求されており、プログラム開発の容易化が求められています。また、ネットワークを介した広域連携も求められています。この要求に応えるためには、適切なOSが望まれますが、適用分野毎に要求が異なるので汎用OSでは不十分です。

本研究では、要求に応じて簡単にOSの拡張ができ、また融通性に富む分散処理OSの検討と試作を行っています。

■ 広域協調処理プラットフォーム
個々のプログラムがネットワーク上で連携相手を探し、協調動作できるプラットフォーム(OS)。



試作OSのゲストOSとしてMINIXを起動したところ。loginして通常のように使用できる。OSはLinux上で開発を行い、VMware(仮想PCソフトウェア)で実行テストをする。



H2OプロジェクトはWebサーバを使って公開されている。
<http://research.nii.ac.jp/H2O/>

ソフトウェア研究系

情報処理の中核を成すソフトウェアの諸概念について研究します。ソフトウェアについて記述言語、処理系、開発法などの側面から、系統的に考究することによって、新しいソフトウェアコンセプトの創出を目指します。このような研究を通して、ソフトウェアの能力、生産性、信頼性を飛躍的に高め、より複雑で高度なシステムの構築を可能にします。

- プログラミング言語研究部門 ●ソフトウェア工学研究部門 ●データ工学研究部門 ●分散統合処理研究部門
- システムソフトウェア研究部門(流動研究部門) ●高信頼ソフトウェア研究部門(客員研究部門) ●大規模ソフトウェア研究部門(客員研究部門)

音響・画像情報の研究

ビデオ画像中の人物を探す研究をしています

下図は、ニュース映像アーカイブを解析し、登場する人物の顔と名前の対応関係を学習するシステムの動作例。この例では、4.5時間分のNHK「ニュース7」を処理した結果を示しています。

- 左図:「小泉総理大臣」を入力とし、対応する顔画像を推定した結果
- 右図: 顔画像を入力とし、対応する名前を推定した結果



1. カルザイ議長
2. 方
3. 家
4. 住宅

1. 小泉総理大臣
2. あだち記者
3. パウエル国務長官
4. だ元総理大臣



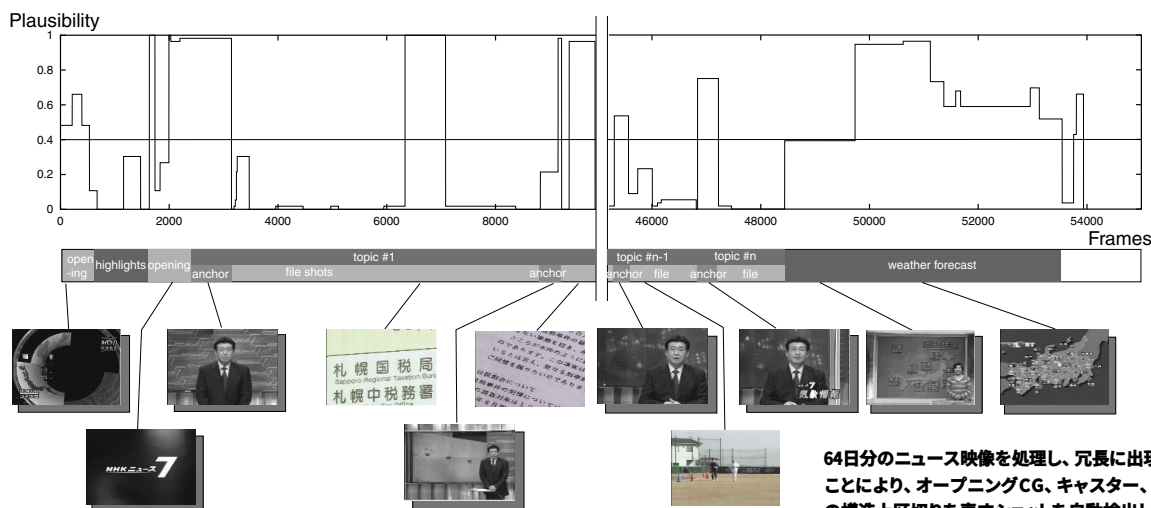
佐藤真一 助教授

映像アーカイブの検索および情報発見に関する研究

BSデジタル放送や、家庭への光ファイバー通信 (FTTH) など、個人向け高速通信ネットワークが急速に展開されています。しかしそれを活用するには、大量の映像データに対する、内容に依存した検索などの大量情報の高速検索技術が不可欠です。

この考えに基づき、われわれの研究グループでは、東京地区の地上波7チャンネルの映像を24時間蓄積し続ける映像アーカイブサーバを構築しました。このシステムは、全自動で運転し続けており、常に最新の1ヶ月分の映像を蓄積しています。本研究は、こうして蓄積した映像アーカイブを使って、映像解析により映像の内容情報を抽出するための研究、映像アーカイブからの情報発見を実現しようとするものです。

■ ニュース映像アーカイブから、ニュースの構造に関する情報を「発見」した例



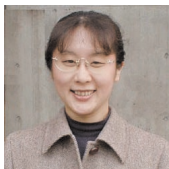
64日分のニュース映像を処理し、冗長に出現するショットを検出することにより、オープニングCG、キャスター、天気予報など、ニュースの構造上区切りを表すショットを自動検出している。上のグラフ (Plausibility) では値が大きくなっている部分が冗長ショットの可能性の高い部分に対応しており、下のサムネイル画像ではグレーになっているものが実際の冗長ショットを表している。

情報メディア研究系

テキスト、画像、音声などの多様な情報メディアについて、表現・解析・検索などの有効な処理方法を研究しています。これらの活動を通して、人間と情報メディアとの関わり方を総合的に考究します。

知的システムの研究

化学反応を予測する知的システムについて研究しています



佐藤寛子 助教授

知識情報学と化学

知識情報学の実問題への応用分野の一つとして化学知識情報学を研究しています。

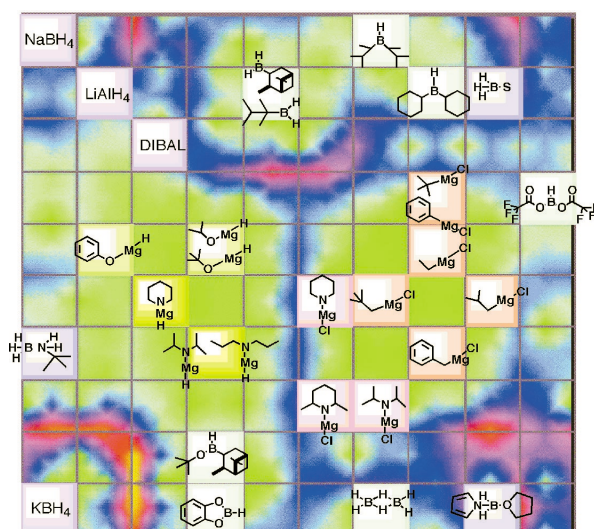
化学は実験や経験から得られる情報に基づき規則や知識を発見する、人の経験と直観の支配する側面の強い学問です。この化学者が辿ってきた規則や知識の発見の歴史を、コンピュータの得意とする別の切り口から見直すことで、新たな側面からの規則や知識の発見に導くことができるのではないかと考えています。

化学情報は原子を基本情報とする論理基盤を持ちながら、その複雑な相互作用の結果である分子の構造、機能、反応の多様性と複雑さを有する点で、一筋縄で処理できない実情報の一つと捉えることができます。化学情報は新機能や新反応により年々、数と多様性と複雑性が増しています。研究の過程では、これらの一筋縄でいかない情報をうまく取扱い、化学情報の表現、系統的整理、知識・ルール発見、知的システム化というそれぞれのフェーズを一つ一つクリアしていく必要があります。

このような複雑な情報処理と実問題を解くための方法論は、化学だけではなく複雑な情報を取扱う広い分野に応用できると考えています。バイオインフォマティクスや材料・薬物設計等の実問題とも密接な関連をもつ研究分野です。

右の図は化学反応においてアルデヒドをアルコールに変換するなどの機能を持つ反応試薬をコンピュータで自動的に分類した結果(図1)と、この分類結果をもとに作った簡単な予測モデルによる機能の予測と化学実験による検証の結果(図2)です。分類は試薬分子の物理化学的性質に基づ

いて行っていますが、化学者が経験と直観で考える機能の類似性と一致する結果を示しました。報告のある既知試薬の構造を少し変えた新規試薬についての予測結果は、その分子の実際の化学合成と実験によって実証されました。



■ 図1：反応試薬を分類した結果

Reagent	Reactant	Product	Predicted values (0~1)	Observed Reacted: 1, Not reacted: 0 (yield)
			0.9	1 (83%)
			1.0	1 (95%)
			0.5	1 (17%)
			0.0	0 (0%)
			0.6	1 (54%)
			1.0	1 (90%) ^{a)}
			0.7	1 (94%)

反応条件 a) : 0°C~r.t., 24h., NaOH, H₂O
その他: THF, 0°C~r.t., 10~24h.

■ 図2：新規試薬についての予測結果と化学実験による実証

知能システム研究系

人間の活動を始めとして自然界に見られる各種の知的活動を分析することによって、知的な振る舞いが可能なシステムや、計算機と人間が適切に協調して問題に対処できるシステムの構築方法についての研究を行います。これらの研究を通して、人間の知的な活動を支援、代行するためのシステムの構築を目指します。

●知識処理研究部門 ●計算知能研究部門 ●人間機械協調研究部門 ●ロボティクス研究部門(客員研究部門)

人間と情報の関連の研究

人間の使える語には、どれくらいの種類があるでしょう



影浦峯 助教授



竹内孔一 助手

右図の語彙情報のモデリングに用いる基本コーパスに基づき、下の図は、LNRE (大量の低頻度事象を扱う確率的枠組みです) モデルにより語彙成長の構造的予測を行った結果 (ここでは、カタカナ語と漢字語／ひらがな語の成長の相違も示しています)。そして、多様に生成される複合語を解析するために有用な、語彙概念構造に基づく言語・知識の研究の枠組みを示したものです。語彙成長の構造的予測図から、カタカナ語は一語当たりの利用頻度は低いのですが、異なり語で考えると、新しい語がどんどん生まれることがうかがえます。

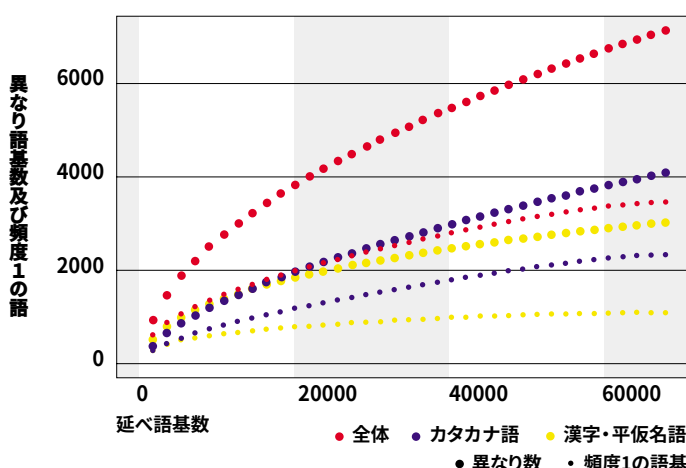
構文上 こうぶんじょう 構文上 NN
 構文 こうぶん 構文 NN K
 上 じょう 上 TLNN K
 の のの SCC W
 制約 せいやく 制約 NS K
 を をを SCA W
 もつ もつ もつ VTAbs W
 長さ ながさ 長さ NN W
 限定 げんてい 限定 NS K
 EFS EFS EFS NN G
 に にに SCA W
 よって よって よる VRArytate W
 定義される ていぎされる 定義され
 定義 ていぎ 定義 NS K
 ささする VSHmi W
 れる れる れる TLVAbs W
 言語 げんご 言語 NN K
 の のの SCC W
 クラス クラス クラス NN G
 は はは SSB W
 文脈依存言語 ぶんみゃくいぞんげん
 文脈 ぶんみゃく 文脈 NN K
 依存 いぞん 依存 NS K
 言語 げんご 言語 NN K
 の のの SCC W
 クラス クラス クラス NN G
 と とと SCA W
 一致する いちちする 一致する V
 一致 いちち いちち NS K
 する する する VSHbs W
 こと こと こと NF W
 が がが SCA W

言葉の構造とコミュニケーション

ドフトエフスキーはどのくらいの言葉を使うことができたでしょう。シェークスピアは？ 孔子は？ これは、古くから議論されてきた問題ですが、未来を見ると、いったいどのくらいカタカナ語が増えていくのか、あるいは、世代間で理解できなくなる言葉がどのくらい増えるのか、異なる言語の間で単語の量はどうか違ってくるのかなど、これに近い、コミュニケーションの基本となる語彙を巡るアクチュアルな問題は多々あります。こうした問題を原理的に考えていくために、特に語彙／語のダイナミクスを構造的にモデル化する研究をしています。実は、この研究は、方法論的には、言語だけでなく、情報メディア一般にも妥当するものです。大きな問題ですから、他の研究者と共同で関連する情報を交換しながら研究をしています。

研究の基礎となるデータの整備は、情報学資源研究センター共同研究の枠組みで行っており、人間・社会情報研究系のスタッフを中心に、東大情報基盤センターや国立国語研究所などとも意見交換をしています。また、語彙変化の時系列的モデル化と、語 (特に複合語) をそのバリエーションも含めて解析する手法、その背景にある知識に関する研究を、人間・社会情報研究系の中の、情報管理学、情報図書館学、情報利用学の各研究部門と共同で行い、構造的モデリングとの統合を試みています。

■ LNRE モデルによる語彙量成長予測



■ 語彙概念構造を使った複合名詞解析

機械 翻訳 [機械=x CONTROL] → 機械で翻訳する
 || 機械による翻訳
 [x CONTROL [BECOME [y BE AT z]]] 翻訳をする機械

 機械 操作 [機械=ACT ON y] → 機械を操作する
 || 操作される機械
 [x ACT ON y] 機械の操作

人間・社会情報研究系

社会環境における情報の問題について研究します。社会における人間と情報との関わり、情報の流通・管理・利用の在り方、情報に関する社会的・制度的な問題などについて研究を行い、人文・社会科学的観点から情報学研究的の体系化を目指します。

研究活動の研究

論文の統計データを研究しています

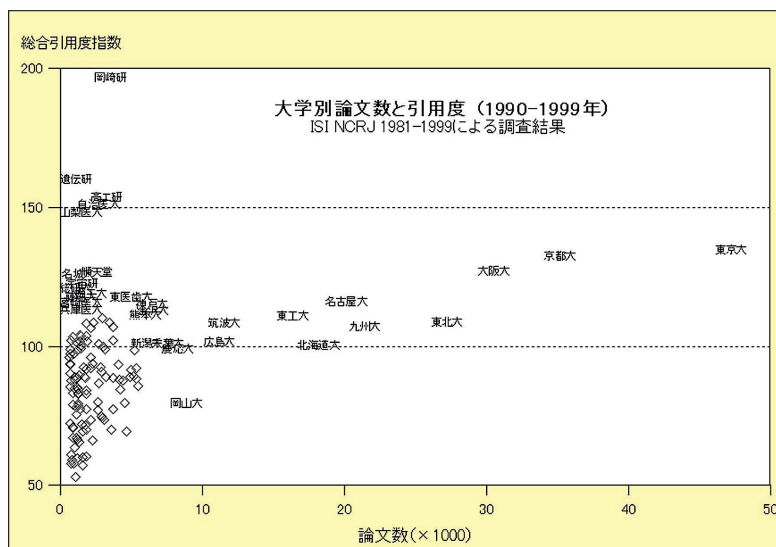


根岸正光 教授

研究分野の体系を研究しています

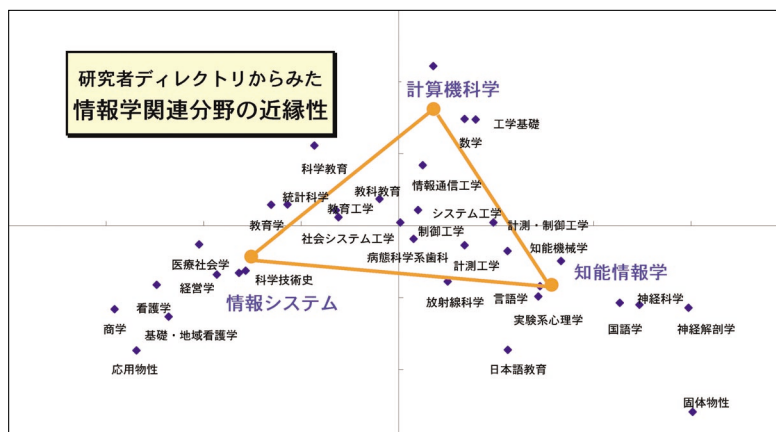
論文の引用度等による大学の特性分析

大学改革の中で、各大学はその歴史と環境を活かして個性化を進めています。引用索引データベースを集計分析すると、論文の生産数とその重要度の指標である被引用数が算出でき、これは、各機関の活動度や研究水準の指標のひとつとして利用が進んでいます。この方面では、米国ISIの引用索引データベースが国際的な状況を観測するためによく使われています。ここでは、ISIの作成したNCR (National Citation Report) データベースについて分析し、各大学の最近10年間の論文数とその総合引用度指数(分野間での論文当たり引用数の格差を調整した指数)を対比させたグラフを例示します。なお、ISIデータベースに収録されない、多くの主として和文の論文についても同様の分析が必要で、このためのデータベースの作成と分析も進めています。



わが国の情報学関連研究の状況

研究者ディレクトリなどのデータベースを利用して、内外における情報学研究の実態を明らかにしていきます。このように、各種の学術情報データベースを利用しながら、各分野での学術研究の現状を分析し、有効な学術情報基盤、研究体制、学術政策の展開や研究のアカウンタビリティ増進に貢献します。



学術研究情報研究系

学術研究には、各分野でさまざまな情報が必要とされ、また、研究の中から新たな学術情報が生産・発信されています。こうした情報の役割や、それを効果的に流通させるようなシステムについて研究します。これにより、「学術情報基盤の高度化」を進めて、学術情報のための情報学の確立を目指します。

●人文社会系研究情報研究部門 ●理工系研究情報研究部門 ●生物系研究情報研究部門

大学院教育

国立情報学研究所では平成14年度より総合研究大学院大学の基盤機関となり、大学院生(博士後期課程)を受け入れています

総合研究大学院大学 情報学専攻

■大学院設置について

国立情報学研究所は、平成14年4月、総合研究大学院大学(総研大)に参加し、同大学の数物科学研究科に「情報学専攻」を開設しました。総研大は、大学共同利用機関を活用して教育・研究を行う大学院(博士後期課程)のみの大学です。教育・研究は、基本的に各専攻の基盤となる大学共同利用機関において実施されます。情報学専攻の学生は、国立情報学研究所において、研究所の教官による教育を受け研究を行います。

本専攻は、加速度的に進歩・発展しつつある世界規模の高度情報社会の実現に向けて、適切な先端情報技術を駆使して、我が国及び国際的な、産業・文化・教育・福祉・生活・環境等に関する様々な問題を解決し、社会を持続的に発展・調和させるための、情報学に関する新しいパラダイムの提案や有用な科学技術を研究・開発するとともに、このような能力を持つ若手研究者及び技術者の養成を行うことを目的としています。

■情報学専攻の構成

教育・研究指導分野は、以下の4つから成り立っており、合計38科目の授業科目が用意されています。

- ・情報基盤科学
- ・ソフトウェア科学
- ・知能システム科学
- ・情報環境科学

また、主たる指導教官に加え、他の教官も指導アドバイスをする複数指導体制であり、幅広い教育研究指導を行っています。



総合研究大学院大学の講義風景



大学院生室

■平成14年度4月入学者選抜実施状況

入学定員	志願者	合格者	入学者
6	18 (1)	14 (1)	14 (1)

(注) 1.()内は女子で内数 2.入学者には外国人留学生1名を含む

■国際大学院コース

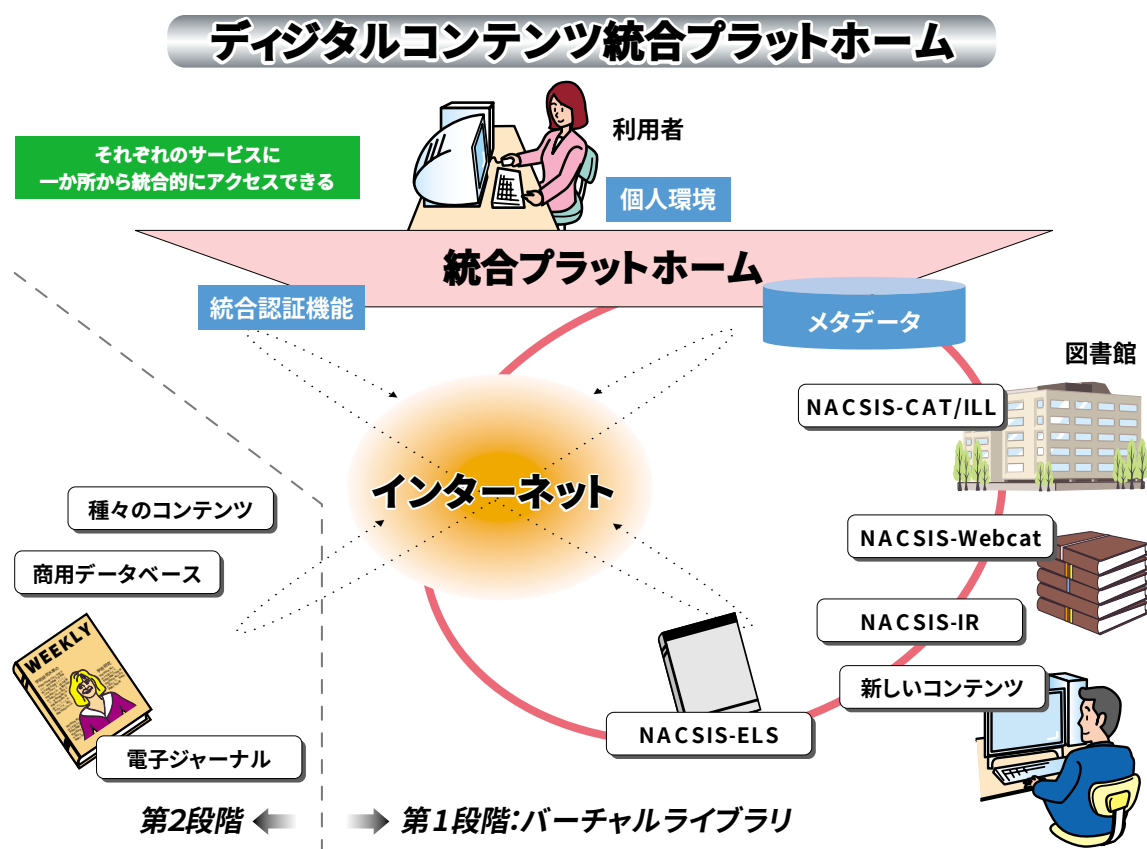
アジアを中心とした外国からの優秀な留学生を募集し、国際的な雰囲気のもとで教育を行い、学術研究の新しい流れに対応できる幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者の養成を目的として、平成14年10月より、国際大学院コースを開設することとしています。

同コースにおいては、英語による講義を原則としており、将来、本コースを巣立った留学生たちが帰国後、あるいは新天地において、国際的なリーダーとして活躍することが期待されています。

実証研究センター

デジタルコンテンツ統合プラットフォームプロジェクトは、インターネット上の品質や組織化の方法のさまざまな異なるデジタルコンテンツから、適切な情報のみを選別・抽出して効率的検索が可能となるよう組織化し提供するための仕組みです。この仕組みの上では、国立情報学研究所の提供している各種データベースのみでな

く、電子ジャーナルや商用データベースを含む種々のコンテンツにも、利用者個人の環境に応じてアクセスすることが可能となります。このような仕組みを実現するためのデータ連携や利用者認証、サーバ認証などの要素技術、またそれらを実証するための環境整備や、プロトタイピングの研究を行っています。



実証研究センター

実証研究センターは、個別の研究系では対応できないテストベッドやプロトタイプ開発環境を整備し、研究成果を情報基盤整備事業や社会に生かすための実証研究を推進します。

- 実証研究推進室 ●共同研究企画推進室 ●超高速ネットワーク研究室(客員研究部門) ●高品質ネットワーキング研究室(客員研究部門)
- フルテキストコンテンツ研究室(客員研究部門) ●バーチャルライブラリ研究室(客員研究部門)

情報学資源研究センター

背景

デジタル化される情報の増大と多様化に伴い、情報の内容（コンテンツ）に注目が集まり、膨大で多様な情報を統合する研究が盛んになっています。情報学の研究を拡大するには、コンテンツの開発、処理ソフトウェアの研究、情報のデジタル化を進める際の標準化など、様々な視点からの情報資源の整備が重要です。

プロジェクト等

当センターでは、現在四つのデータコレクションに関するプロジェクトを進めています。

●「ものプロジェクト」:芸術表現活動のマルチメディア・アーカイブ化とアーカイブ構築支援・提供システムに関する研究

大学とのコラボレーションにより、美術工芸品に関するさまざまな情報を集めたアーカイブの構築とその作り方、および作成する人を支援するシステムや活用するためのシステムに関する探求を行っています。アーカイブは、作品および作品についての解説インタビューの動画や音声を含んだ高品質で多様な情報が取り込まれています。

●映像メディア高度解析プロジェクト

このプロジェクトでは、電子情報通信学会パターン認識・メディア理解研究会のもとに設立された評価用映像メディアデータベース作成に関する検討部会の活動として当研究所と共同して実施しているプロジェクトです。映像処理研究のための評価用映像を作成・配布し、当該研究を振興するのが目的です。放送品質の映像コレクションを利用し、メタデータとともに平成14年度に配布開始予定にしています。

●語彙・語構成研究を考慮した言語コーパス作成と評価

語構成単位を適切にとらえ日本語の基本コーパスを作成し、複合語処理や語構成論や語彙論に役立つものを作成しています。1999年以降の予備データを用いて企業・大学数機関が参加した専門用語自動抽出テストを行い、ターミノロジー誌特集号（第6巻2号）で応用成果の一部を整理しました。

●NTCIR情報検索システム評価用テストコレクション構築プロジェクト

このプロジェクトでは、多数の研究者が参加するワークショップ型共同研究を通じ、情報アクセス技術の研究に必要な大規模な標準データセット（テストコレクション）の研究・開発を行うことにより、情報検索や言語処理などの実用的な技術の発展に貢献しています。2002年10月に3回目の成果発表を行います。

国際会議等の主催

NTCIRワークショップ
第一回1999年9月 6カ国28グループ参加
第二回2001年3月 8カ国45グループ参加
第三回2002年10月開催予定
2001年ダブリンコア・メタデータ
およびその応用に関する国際会議（2001～）



情報学資源研究センター

情報学資源研究センターは、1. コンテンツを中心とする情報資源に関わる研究の推進 2. 情報学の研究を推進する上で必要な情報資源の収集と提供 3. 情報資源を使う共同研究などの推進 を行うために研究所内に設置された研究施設です。情報学の研究に必要な大規模なコンテンツやそれを扱うソフトウェアの開発、コンテンツ開発のための標準などの情報資源に関する研究を、所内の各組織や大学、産業界等と協力して推進していきます。

研究協力／国際交流

国際交流

■ 外国人研究員の受入れ（平成13年度）

氏名・所属・国籍	研究課題	招へい期間
ANGELINO, Henri (トゥールーズ国立理工科学院教授、フランス共和国)	グローバル情報環境における他言語問題と高等教育の調査研究	平成12年12月～平成14年11月
ORIA, Vincent (ニュージャージー工科大学助教授、コートジボワール共和国)	マルチメディアデータベースに関する研究	平成13年6月～平成13年8月
DAILLE, Béatrice (ナント大学助教授、フランス共和国)	日仏専門用語対訳抽出の研究	平成13年10月～平成13年12月

■ 外国人来訪者の受入れ（平成13年度）38人

■ 国際研究集会派遣研究員（平成13年度）1人

共同研究（平成13年度）

国立情報学研究所は、大学共同利用機関として、全国の国公私立大学等の研究者に交流、研究の場を提供し、積極的に共同研究を行っています。平成13年度は、33件の共同研究を実施しました。

連想計算エンジンGETAによる大規模文書分析手法の研究	分散型地理画像における多次元データ表現とアクセス方法に関する研究
統合メディア処理とその基礎技術に関する研究	パピヨンプロジェクト-多言語辞書データベース
適用分野に応じて拡張できる実時間分散OS構成法の研究	古典論理に対する型理論
語彙・語構成研究を考慮した言語コーパス作成と評価	社会コミュニケーション(ビジネス情報基盤)の研究
全光通信ネットワーク実現技術の研究	学会関連データの関連分野推定
映像メディア高度解析プロジェクト	世論調査・社会調査のデータマイニング及び共同利用の研究
二言語コーパスからの日英対訳辞書自動構築と評価に関する研究	移動エージェントによるデータ検索統合システムの実証研究
インターネット分散コンピューティングネットワークに関する研究	スーパーSINETにおける超高速ネットワーク技術の開発
大規模テストコレクションの構築と情報検索システムの比較評価	共生型自律ロボットの研究
進化型ソフトウェア・アーキテクチャの研究	ネットワークを用いた大規模衛星データの準リアルタイム転送実験
離散アルゴリズムと組合せ最適化に関する研究	芸術表現活動のマルチメディア・アーカイブ化とアーカイブ構築支援・提供システムに関する研究
高等教育を対象とするInternetを用いた遠隔教育の研究	音楽の類似性に関する研究
物理学分野における分散型オンラインジャーナルの研究	コミュニティ創造型遠隔教育の研究と実践
アニメ画像、CG画像を対象とした著作権保護技術に関する研究	CFSを用いた情報検索システムに関する研究
パターン認識およびメディア理解に関する研究	バーチャルメディアスペースグリッドに関する研究
デジタル・シルクロードの研究	多言語マルチメディア文書管理における研究
ドメインおよび言語間移植可能情報アクセスシステムの研究	

研究成果の普及

国立情報学研究所では、情報学に関する研究の成果を幅広く社会に還元するため、講演会・シンポジウム等の開催や出版物・広報誌の刊行などを行っています。

公開講演会の開催

研究所が進めている研究開発や事業活動等に関連した今日的課題をテーマとして発表・討議する「国立情報学研究所公開講演会」を関西会場と東京会場とで開催しています。



公開講演会（東京会場：一橋記念講堂 平成13年12月）

シンポジウム・研究会等の開催

情報学研究について、国内外の研究者等と幅広い視点から討議するシンポジウムやワークショップ等を開催しています。情報学研究に関心のある研究者・技術者の交流の場として「NII定例研究会」を毎月開催し、研究所内外の研究者による研究発表等を行っています。

オープンハウスの開催

研究者、大学院入学希望者や一般の方も含めた幅広い層を対象に、研究所の諸活動や研究成果を紹介する「オープンハウス（一般公開）」を開催するなど、開かれた研究所として外部にも公開しています。



オープンハウス（学術総合センター平成14年2月）

公開講座・セミナー等の開催

一般の方を対象とした公開講座・セミナー等についても、随時実施しています。とくに国際高等セミナーハウスを会場として夏期を中心に年数回開催している「軽井沢土曜懇話会」は、研究所内外の研究者・有識者を講師に迎え、地域密着型の事業として定着しています。



末松所長による講演（軽井沢土曜懇話会）

出版物の刊行

研究所の研究成果を図書や定期刊行物として公表します。

・NII Journal

研究所の研究活動に関する論文等を掲載する機関誌。年2回刊行。関係各機関へ送付するとともに、電子図書館サービス（NACSIS-ELS）においても公開しています。

・NII Technical Report

研究所の研究活動に関する論文やProceedings等への投稿原稿、マニュアル等の研究成果を出典の明らかな形で速やかに外部へ公開するために、テクニカル・レポートを発刊しています。国立情報学研究所のホームページから参照できます。

・情報学シリーズ

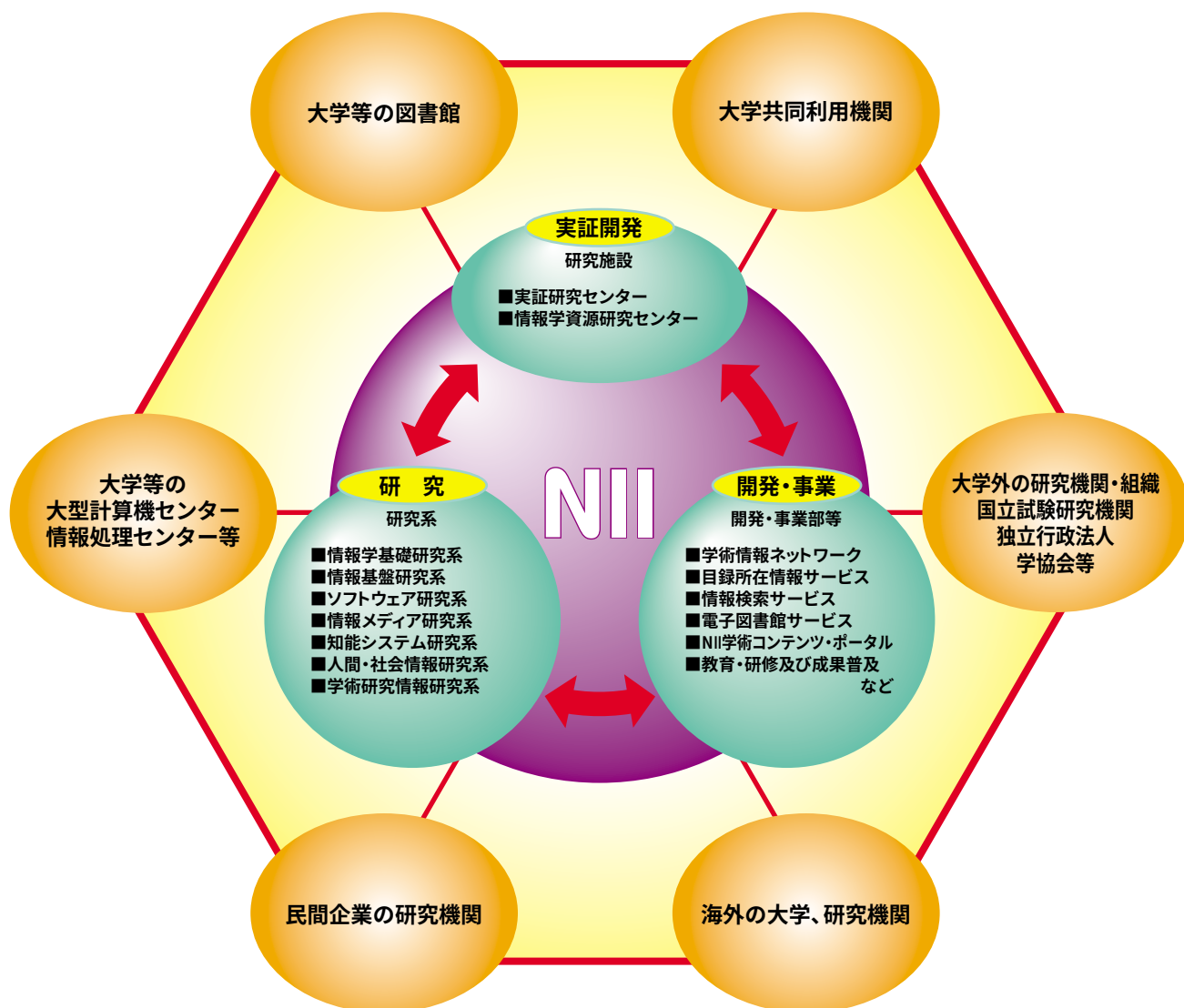
研究所教官の研究内容や研究所が開催する講演会等の発表内容をまとめた単行書を国立情報学研究所監修の下に「情報学シリーズ」として刊行しています。

国立情報学研究所における開発・事業について

国立情報学研究所の主要な設置目的の一つは、学術情報の流通のための先端的な基盤の開発と整備を行うことです。学術研究を推進する上で必要とされる学術情報基盤は、ネットワーク、コンテンツ及びアプリケーションの全ての面において、極めて高い先端性を備えたものであることが求められています。このことは、情報学研究の成果を速やかに学術情報基盤の整備・充実に反映させることによって実現されるものです。情報学研究の将来を考えると、これら両面の活動をいわば車の両輪のように一体的に推進するこ

とが重要です。

国立情報学研究所では、学術情報基盤の構築・運用、大学図書館や学協会等との連携・協力、システム開発とその運用に関連する業務を行う開発・事業部を置き、研究組織との密接な連携・協力の下に、研究者が学術情報基盤の整備に参画できる組織・体制を構築し、得られた研究成果を実証的に適用・実用化することにより、我が国の学術情報基盤の整備・強化に貢献します。



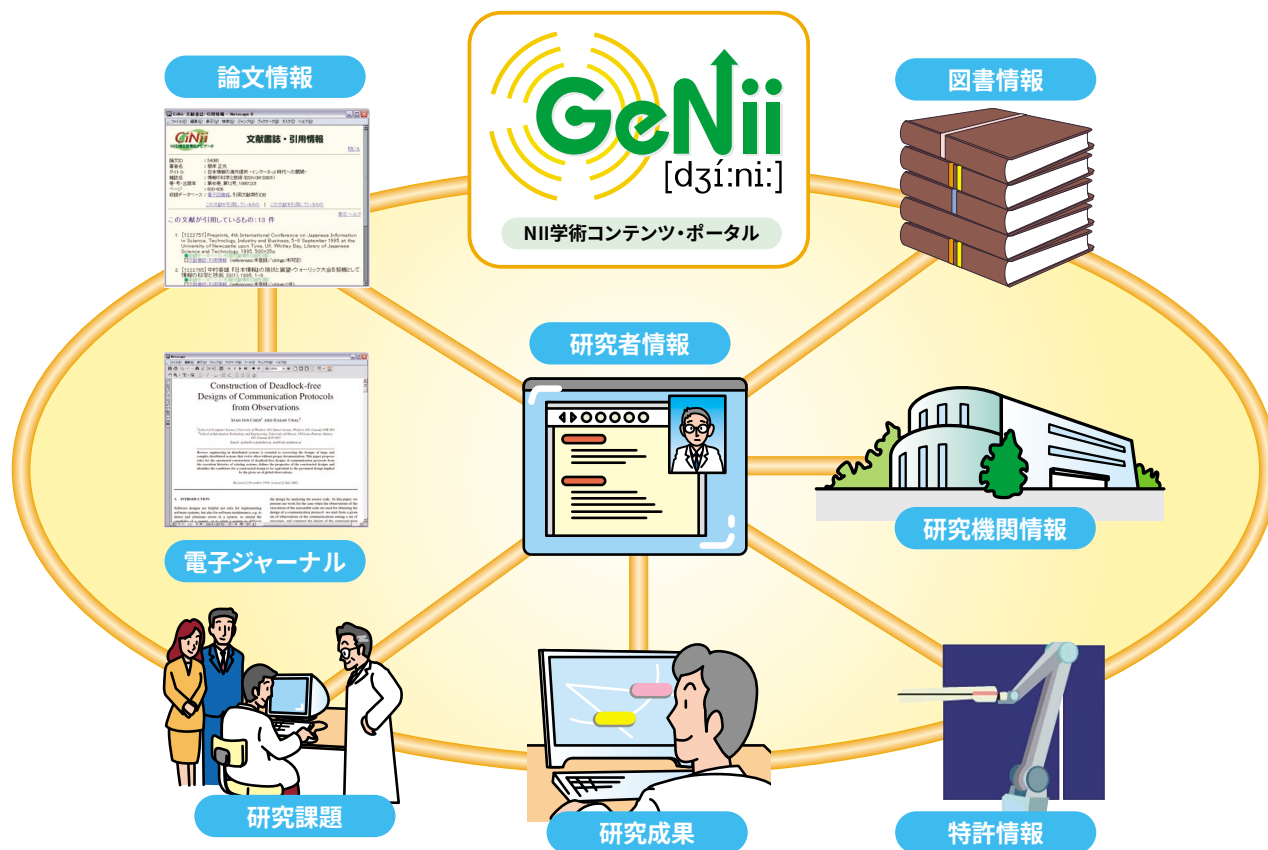
GeNii (NII学術コンテンツ・ポータル)

<http://ge.nii.ac.jp/>

GeNii(ジーニイ Global Environment for Networked Intellectual Information: NII学術コンテンツ・ポータル)は、国立情報学研究所の各種サービスで提供しているコンテンツを始め、国内外の有用な学術情報資源を連携させることを目標として、学術研究に必要な情報を統合的に利用できる

環境の構築を進めています。

従来、各々の目的により作成され、様々な場所に蓄積されている学術情報を相互に関連づけて提供することにより、それらの価値が一層高まり、学術研究の発展に寄与できることを期待しています。



いろいろな切り口からの内容・機能の提供を計画しており、準備が整ったものから順次公開していきます。

引用文献情報ナビゲータ

- 引用・被引用文献へのリンク
- 本文へのリンク

図書情報ナビゲータ

- 図書の内容情報の検索・表示
- 類似図書の検索・表示
- 図書館所蔵情報の表示

研究紀要

- 全国の紀要情報を一括検索
- 本文へのリンク

大学の学術情報資源

- 大学内の資源情報をメタデータにより一括検索
- 学術情報資源へのリンク

学術情報ネットワーク (スーパーSINET / SINET)

<http://www.sinet.ad.jp/>

学術情報ネットワーク(SINET)は、日本全国の大学、研究機関等の教育・研究及び学術情報の流通促進を図るため、全国にノード(ネットワーク接続拠点)を設置し、大学等の研究機関を接続した情報ネットワークであり、平成14年4月末

現在744の機関が接続しています。また、国際的な研究情報の流通促進及び海外の研究ネットワークとの連携を図るため、米国のAbilene^{*1}や欧州GÉANT^{*2}等の研究ネットワークと相互接続しています。

スーパーSINET

スーパーSINETは、観測実験・シミュレーション等で大容量のデータを扱い、超高速・広帯域のネットワークを必要としている、高エネルギー・核融合科学、宇宙・天文学、遺伝子情報解析(バイオインフォマティクス)、スーパーコンピュータ等を連動する分散コンピューティング(GRID)及びナノテクノロジー等の先端的研究分野を対象に、大学等の学術研究機関間を10ギガビットの速度で接続し、これら研究の情報基盤として平成14年1月に運用を開始しました。光波長多重化装置(WDM)及び光クロスコネク(OXC)の光伝送システムを用いた、世界最高速の研究用インターネットです。今後は、上記の研究分野に加え、スーパーSINETを用いた新たな研究プロジェクト等の提案を受け、更なる先端的研究の促進を図っていく計画です。

IMnet/ITBL

IMnet(Inter-Ministry Research Information network)^{*3}とは、平成15年度を目途として、平成14年度から段階的にSINETに統合すると共に、平成13年度から開始したITBL^{*4}については、平成14年3月から順次スーパーSINETに接続し、効率的な運用を目指しています。

^{*1} Abilene 次世代インターネットの開発プロジェクトである「Internet2」が運用するテストベッドであり、全米約190以上の大学研究機関等が参加

^{*2} GÉANT 欧州委員会(EC)が政策的に構成する汎欧州研究ネットワークであり、30国以上で3000以上の研究・教育機関が参加

^{*3} IMnet 省際研究情報ネットワーク：科学技術振興事業団(JST)が運用するネットワークであり、約100の国立研究機関等が参加

^{*4} ITBL IT-Based Laboratory: IT技術を活用し仮想的な共同研究環境を実現するプロジェクトであり、平成13年度から開始

平成14年度新規ノード(予定) ■スーパーSINET(平成14年10月～)

北海道大学
東北大学金属材料研究所
流体科学研究所
筑波大学
東京大学物性研究所
東京工業大学
早稲田大学
岡崎国立共同研究機構
同志社大学
九州大学

■SINET

平成14年10月～	平成15年1月～
早稲田大学	静岡大学
同志社大学	富山大学
	福井大学
	香川大学
	大分大学

平成14年度予算措置回線速度

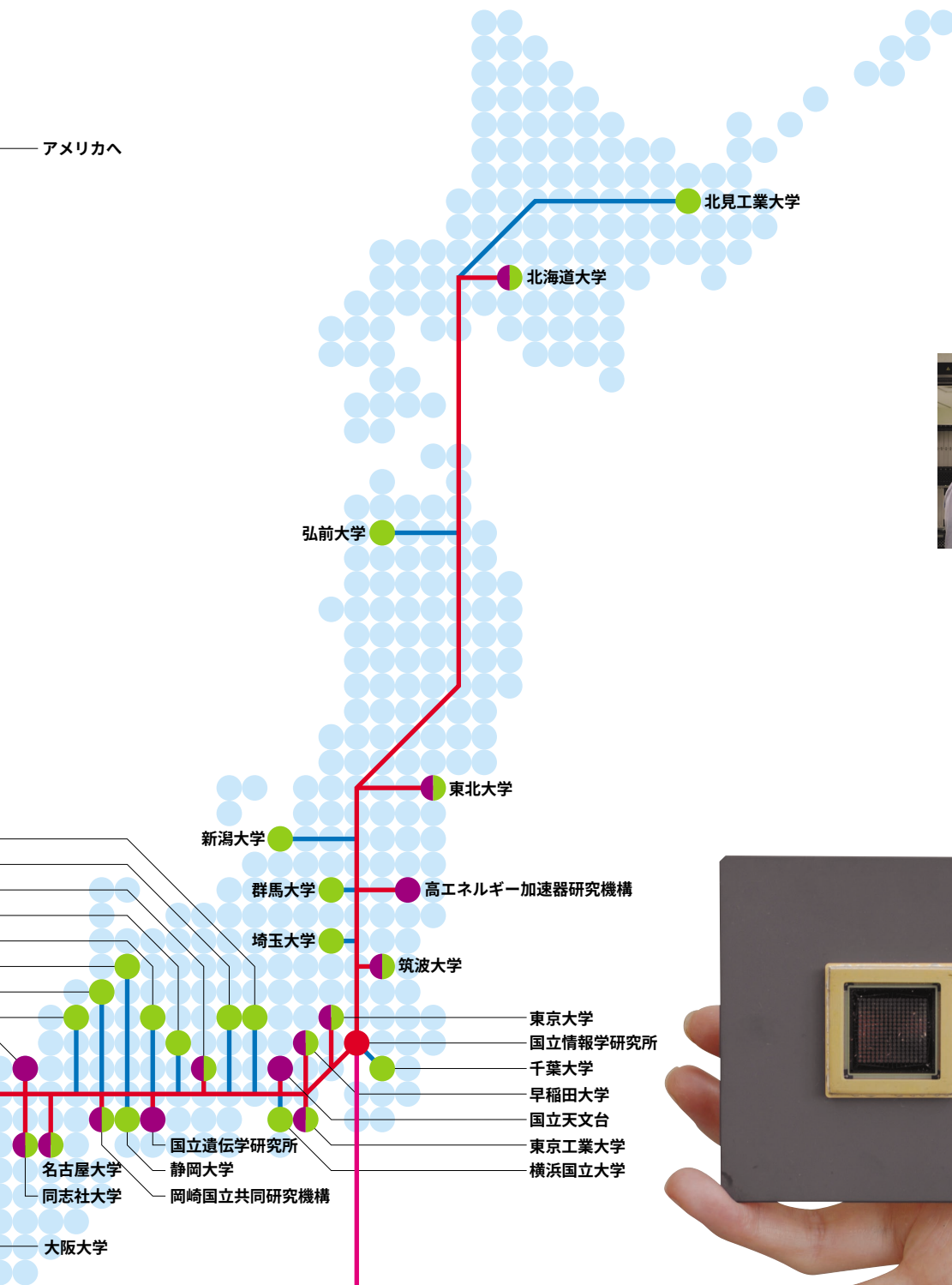
- スーパーSINET(10Gbps)
- 国際回線(2～450Mbps)
- SINET(20～225Gbps)
- 国立情報研究所
- スーパーSINETノード機関
- SINETノード機関
- スーパーSINET及びSINETノード機関

学術情報ネットワーク加入機関数(平成14年4月末現在)

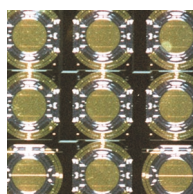
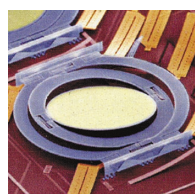
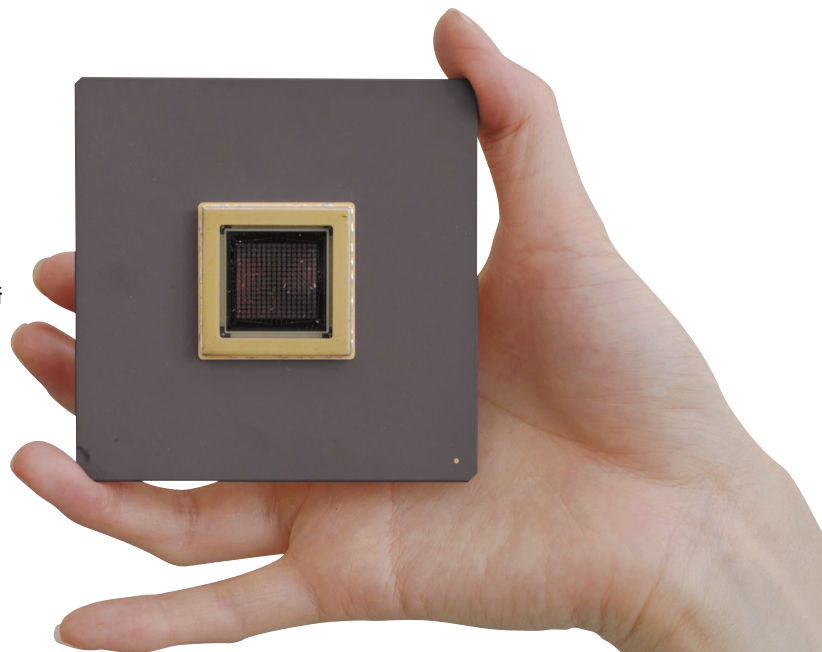
国立大学(93)
公立大学(48)
私立大学(278)
短期大学(96)
高等専門学校(44)
大学共同利用機関(15)
その他(170)
合計(744)



アメリカへ



光クロスコネク (OXC: Optical Cross Connect) は、中継回線相互の接続を切り替える装置 (電気信号に変換する電子的なクロスコネクと光信号のまま切り替えることができる光クロスコネクの2種類があります)。



左: 微小ミラー
右: スイッチエレメント

光クロスコネクは、ナノテクノロジーの成果の 1つである微小ミラー (MEMs: Micro Electronic Mirrors) を用いており、微小ミラーは、2つの支点の周りを可動します。6センチ四方のチップに256個のミラーがのせられています。

アメリカへ
イギリスへ
タイ王国へ

目録所在情報サービス

<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/>

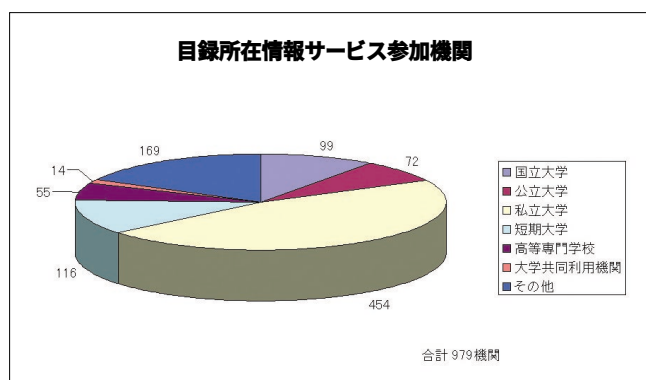
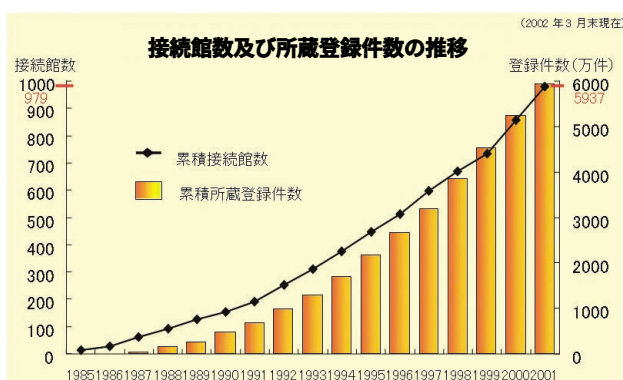
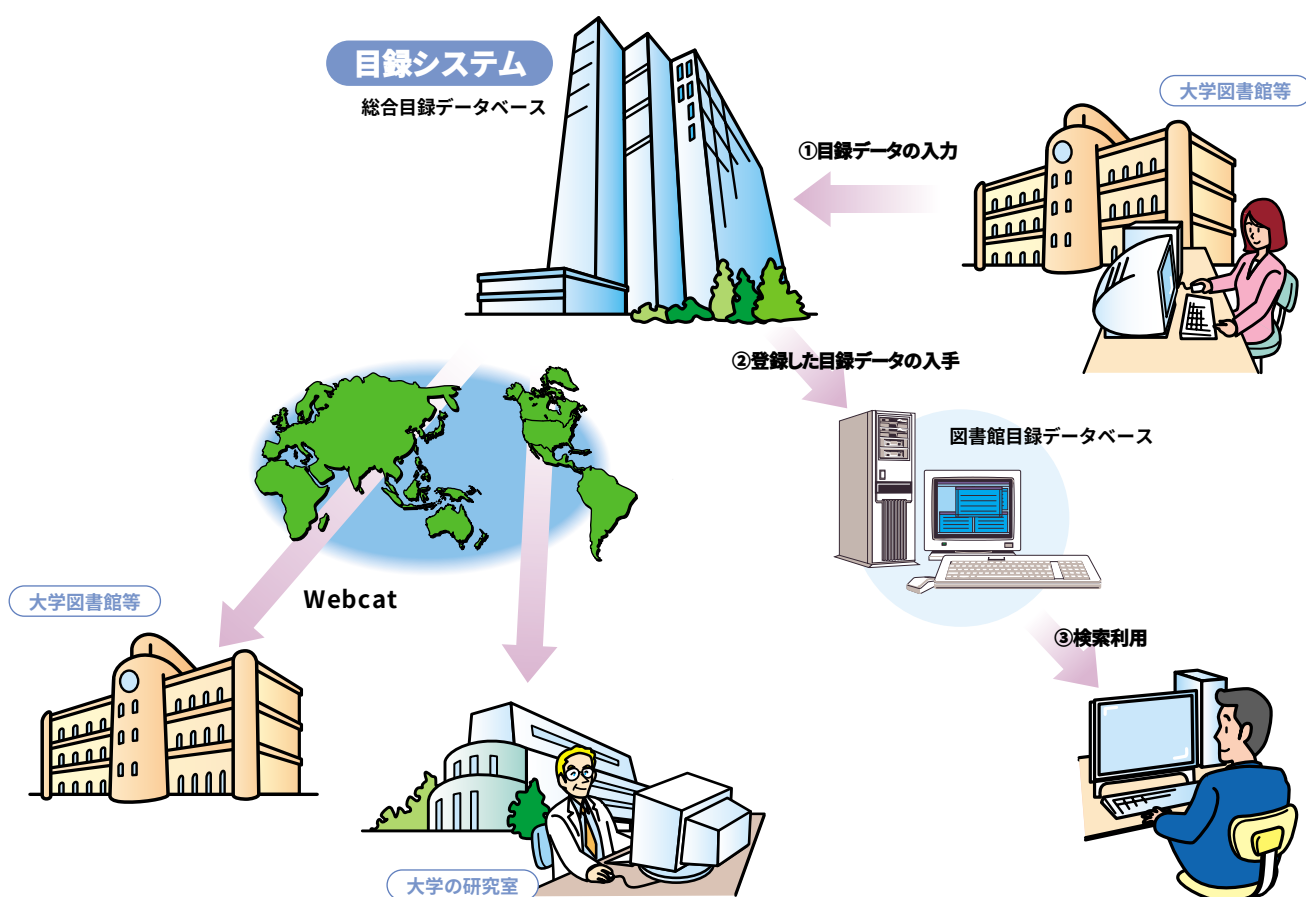
目録所在情報サービスには、目録システムと図書館間相互貸借システムがあります。

目録システム (NACSIS-CAT)

目録システム (NACSIS-CAT:CATaloging) は、研究者の研究活動を支援するため、全国の大学図書館等にどのような学術文献(図書・雑誌)が所蔵されているかが即座に分かる総合目録データベースを構築するシステムです。この目録システムでは、データベースを効率的に形成するため、標準的な目録データ (MARC) を参考に

するとともに、全国の大学図書館等によるオンラインの共同分担入力が行われています。

このようにして構築された総合目録データベースは、WWW検索サービス (Webcat) で誰でも自由に利用できます。



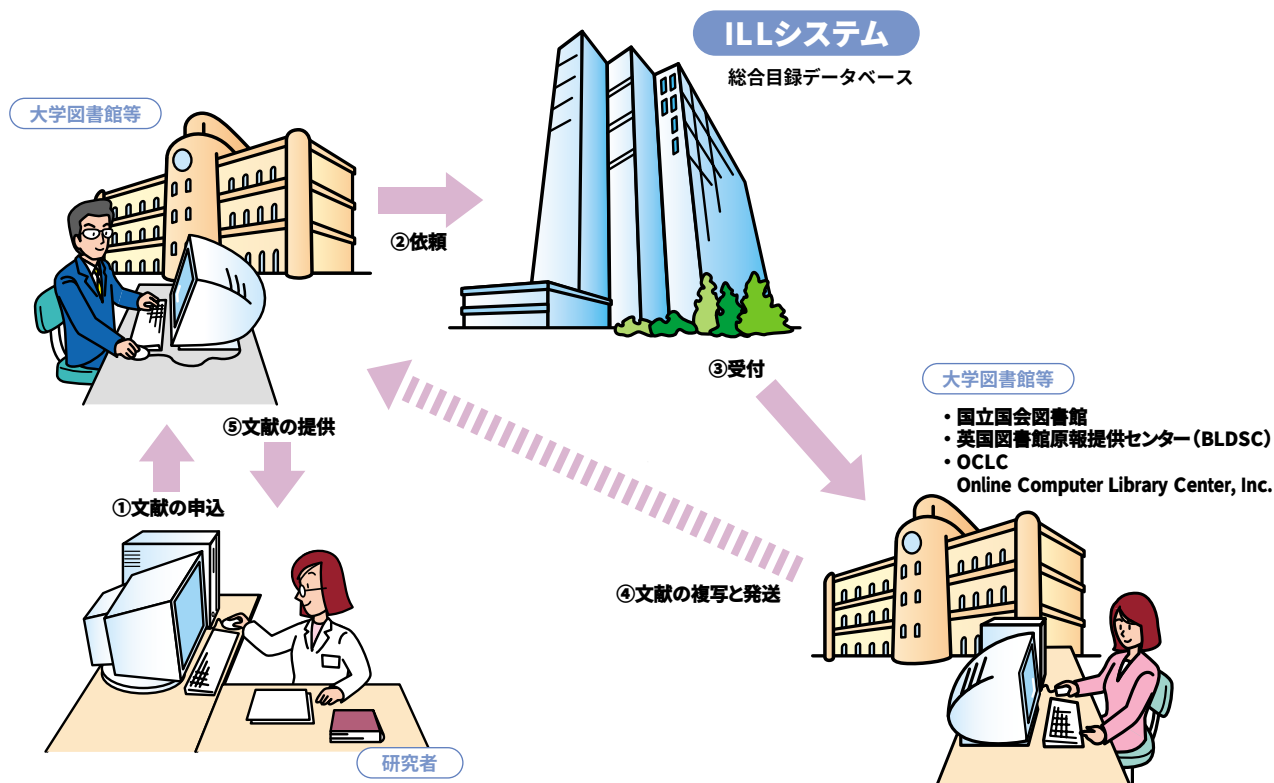
図書館間相互貸借システム (NACSIS-ILL)

図書館間相互貸借システム (NACSIS-ILL: Interlibrary Loan) は、大学等の研究者に学術文献を提供するため、図書館間で図書や雑誌論文を相互に利用し合うための連絡業務を支援するシステムです。

目録システムで構築される最新の総合目録データベースを活用することにより、業務の効率化と、利用者への文献情報提供の迅速

化を図っています。

また、このシステムから国立国会図書館や英国図書館原報提供センター (BLDSC) へ文献提供の依頼をすることもできます。海外の ILLシステムと連携することにより、海外の大学図書館等との相互貸借サービスも可能となっています。



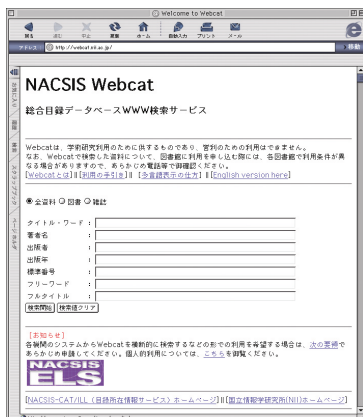
Webcat

<http://webcat.nii.ac.jp/>

Webcat利用状況 (平成13年度実績)

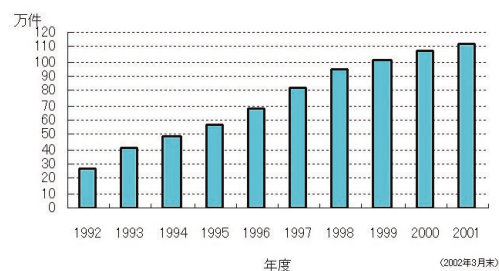
Webcat利用回数 (検索件数)

38,150千回



ILLシステムの利用状況

ILLレコード件数

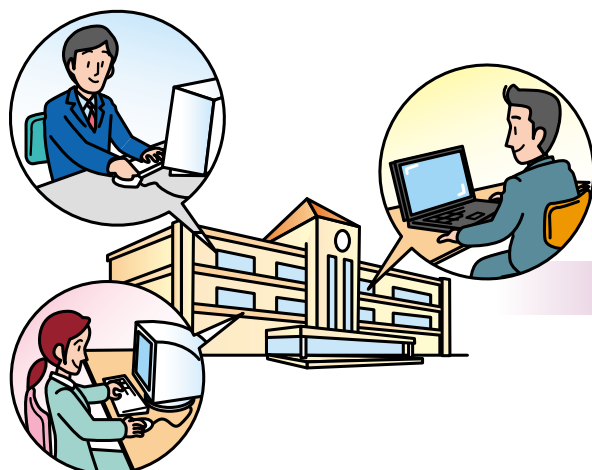


情報検索サービス (NACSIS-IR)

<http://www.nii.ac.jp/ir/>

情報検索サービス(NACSIS-IR:Information Retrieval)は、学術研究情報を迅速かつ確実に研究者に提供することを目的として、人文・社会・自然科学の分野にわたって約1億件の学術情報を蓄積し、オンラインにより提供しています。

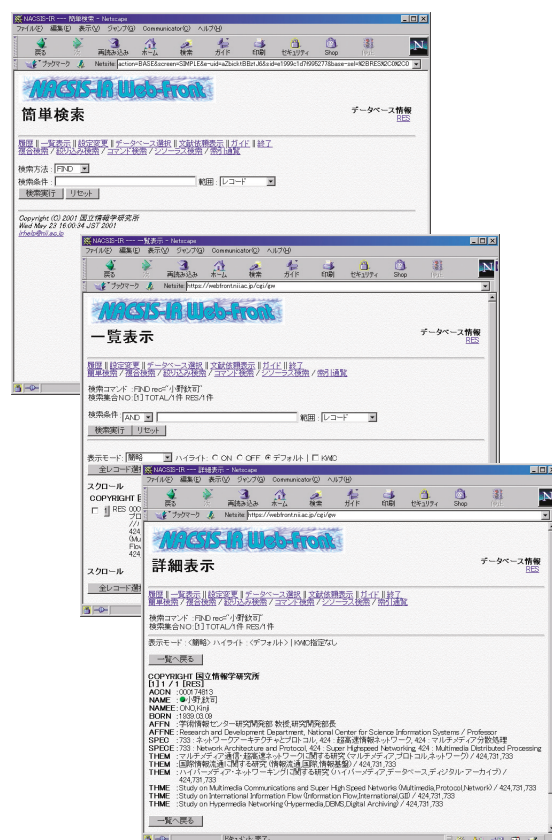
機関別定額制



個人別従量制



平成14年4月から新たに『機関別定額制』のサービスを開始しました。これにより、機関が一定額の支払いをすることで機関に所属する方の全てが情報検索サービスを簡便に利用することができます。



■ 収録状況 (平成14年4月現在)

提供データベース数	収録件数
53種	105,982千件

■ 利用状況 (平成13年度実績)

登録者数	利用回数	接続時間	表示件数
8,717人	61千回	156千分	1,900千件

情報検索サービスの利用について

利用者の範囲

- 個人利用者：大学、短期大学、高等専門学校、大学共同利用機関等の職員及び大学院学生等
 国立試験研究機関並びに研究又は研究支援を目的とする独立行政法人及び特殊法人等の職員
 学術研究法人及び大学に相当する教育施設等の職員、学会の正会員
- 機関利用者：大学、短期大学、高等専門学校及び大学共同利用機関等
 国立試験研究機関並びに研究又は研究支援を目的とする独立行政法人及び特殊法人等
 学術研究法人及び大学に相当する教育施設等、学会

利用料金

- 個人利用者：作成・導入データベースは、接続料1分間50円、ヒット料1件当たり13円
 目録系・受入データベースは、接続料1回接続ごとに30円
- 機関利用者：機関に属する常勤の教員・研究者の人数に応じた料金(年額)

利用時間

24時間サービス(ただし、毎週月曜日8:00~9:00、3月31日及びシステム保守のため必要な日時を除く)

情報検索サービス提供データベース一覧

作成データベース（本研究所が企画・作成したもの）

経済学文献索引データベース
 学術論文データベース（理学、化学、電子）
 臨床症例データベース
 科学研究費補助金研究成果概要データベース
 科学研究費補助金採択課題データベース
 学位論文索引データベース
 学術関係会議等開催情報（日本学術会議編）
 学術雑誌目次速報データベース
 引用文献索引データベース
 学会発表データベース
 研究者ディレクトリ
 データベースディレクトリ
 民間助成研究成果概要データベース
 目録所在情報データベース（図書、雑誌）

導入データベース（データベース作成機関から導入したもの）

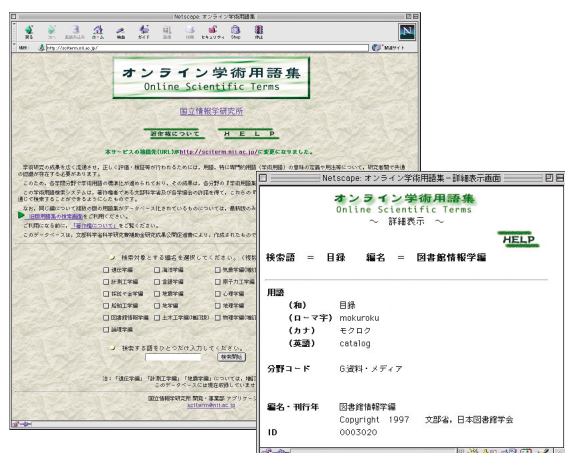
Arts and Humanities Citation Index
 Social Sciences Citation Index
 Science Citation Index Expanded
 国会図書館科学技術論文議録データベース
 国会図書館洋図書目録データベース
 雑誌記事索引データベース
 民間助成決定課題データベース
 JPMARC
 LCMARC (Books, Serials)

受入データベース（他の機関・研究者等が作成したものを受け入れたもの）

大型コレクションディレクトリ
 文化財科学文献データベース
 印度学・仏教学研究ディレクトリ
 現代邦楽作品データベース
 社会学文献情報データベース
 教科教育実践学関係資料（国語科）データベース
 維新史料網要データベース
 古文書目録データベース
 北海道大学北方資料総合目録データベース
 アジア歴史研究者ディレクトリ
 中央アジア研究文献索引データベース
 中東・イスラーム研究文献索引データベース
 スラブ地域研究文献データベース
 日本独文学会文献情報データベース
 ロシア外交史料館日本関連文書目録データベース
 日本アメリカ研究文献情報データベース
 東南アジア関係文献目録データベース
 化学センサーデータベース
 化学と教育誌データベース
 RAMBIOS
 霊長類学文献索引データベース
 学協会集会スケジュール（日本工学会編）
 日本建築学会文献索引データベース
 日本の医学会会議録データベース
 地理学文献データベース
 家政学文献索引データベース

オンライン学術用語集

<http://scitem.nii.ac.jp/>



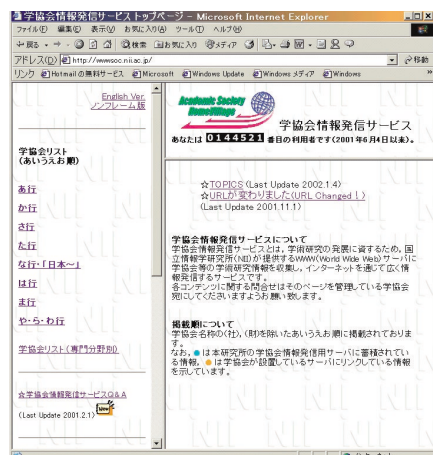
学術研究の成果を広く流通させ、正しく評価・検証が行われるためには、専門用語（学術用語）の意味の定義や用法等について、研究者間で共通の認識が必要です。このため、各学問分野で学術用語の標準化が進められており、その成果は『学術用語集』として刊行されています。『オンライン学術用語集』（Scitem）では、『学術用語集』に収録されている学術用語を著作権者である文部科学省と各学協会の許諾を得て、インターネットを通じて無料で検索できるようにしています。主な収録項目は、用語（和・ローマ字読み・カナ読み・洋）、品詞、参照先用語、備考です。

■ 収録状況（平成14年3月現在） ■ 利用状況（平成13年度実績）

収録編数	収録用語数	年間アクセス回数
22編	128千語	190千回

学協会情報発信サービス

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/>



学協会情報発信サービスとして、学協会のホームページへのリンク集であるAcademic Society Home Villageを運営しています。

このサービスでは、参加学協会が公開する学術研究に関する情報をインターネットを通じて無料で閲覧することができます。

また、キーワードによる検索ツールを用意しており、当サービス用サーバに収録されている学協会情報の所在について、効率的に探し出すことができます。

参加学協会は学協会名称の五十音、アルファベット順及び専門分野別に掲載されています。

■ 収録状況（平成14年3月現在） ■ 利用状況（平成13年度実績）

参加学協会数	内 訳		年間トップページ アクセス回数
	ホームページ 構築サービス	リンクサービス	
710学会	562学会	148学会	361千回

電子図書館サービス (NACSIS-ELS)

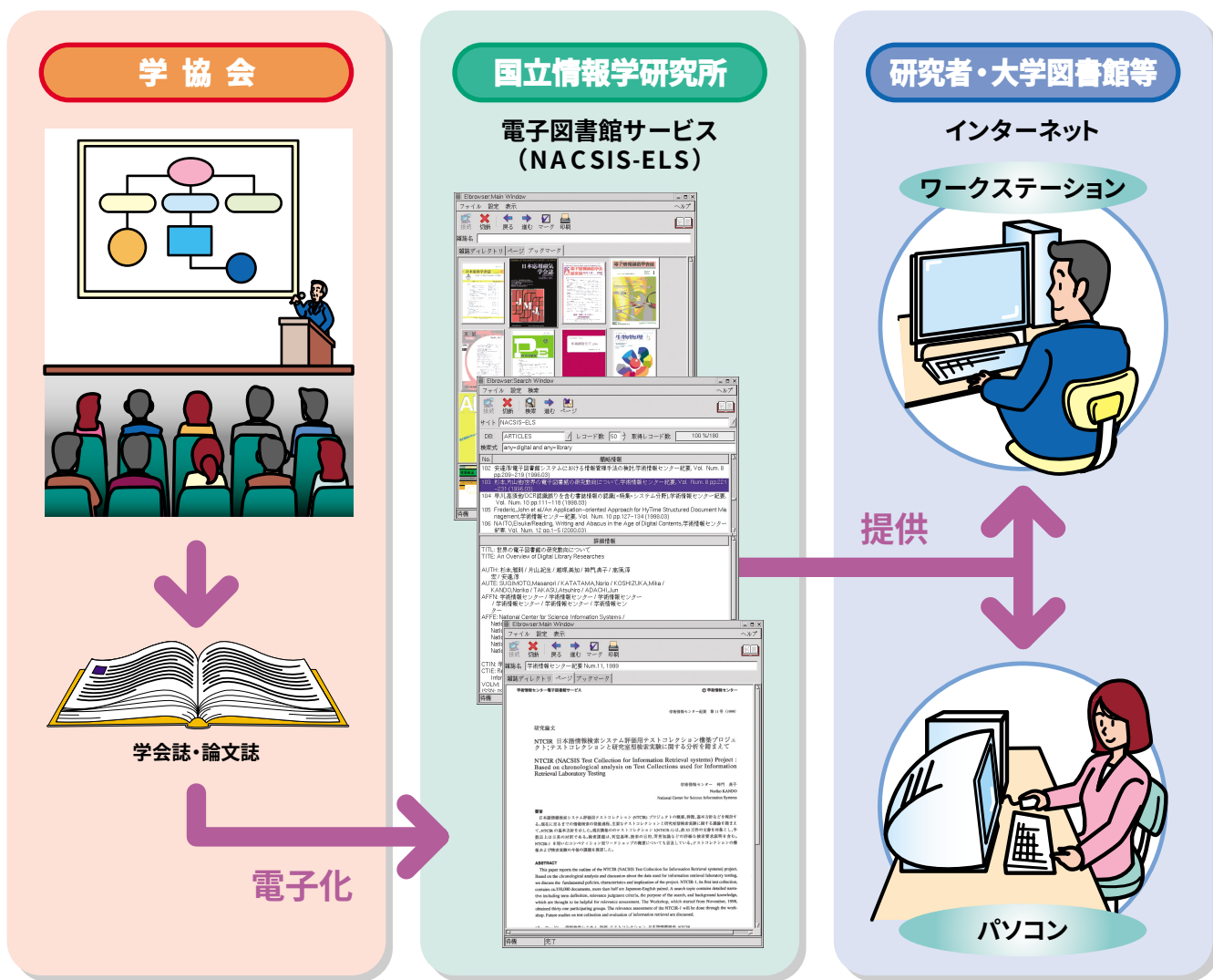
<http://www.nii.ac.jp/els/>

電子図書館サービス (NACSIS-ELS : Electronic Library Service) は、学術雑誌のページをそのまま電子化し、書誌情報とともに検索できるようにした情報サービスで、インターネット上で利用できます。研究者の持つコンピュータで、タイトルや著者名等の情報を手がかりに論文を得ることができるほか、雑誌の表紙や目次から記事を探し、ページをめくるように読んでいくこともできます。また、プリンタ

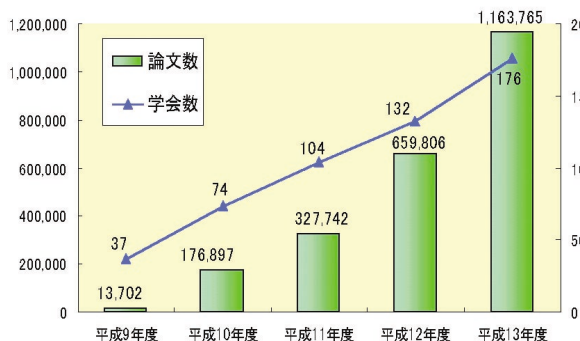
への高品質の印刷も可能です。

現在の収録状況は、日本の学協会が発行する学術雑誌が中心で、協力学協会を増大により提供可能な情報の拡充に努めています。

なお、電子図書館サービスの一環として、平成13年度からOxford University Press (OUP) 刊行の電子ジャーナル (171誌) を試験提供しています。



電子図書館サービス収録状況



■ 海外電子ジャーナルサービス (試行)

OUP利用状況 (平成13年度実績)

利用登録機関数	利用回数
487	1,259千回

国際事業の展開

学術研究水準の向上を図る上で、世界的規模で学術情報の流通を促進していくことが不可欠です。国立情報学研究所では、各種の学術情報サービスの国際展開を図るとともに、海外の大学・機関との連携・協力を進めています。これ

により、海外の大学・研究機関等が有する情報へのアクセスを改善するとともに、我が国の学術研究に関する情報を国際社会に発信し、国際的な学術情報の流通と標準化活動に貢献しています。

海外の日本研究機関・図書館との協力

欧州・アジアなど海外で日本語資料を扱う研究図書館や日本研究機関など、40の大学・機関が国立情報学研究所の目録システム(NACSIS-CAT)に参加しています。現在、これら海外の大学・機関により24万件以上の学術文献の所蔵登録が行われています。平

成10年度からは、中国との学術情報交流プロジェクトを開始し、国際交流基金との協力により、北京日本学研究中心図書資料館の情報化支援を行っています。

海外の目録システム参加機関

英国図書館オリエンタル・コレクション部
ケンブリッジ大学図書館
オックスフォード大学ボドリアン図書館
シェフィールド大学日本研究センター
スターリング大学図書館
ロンドン大学東洋・アフリカ研究学部図書館
国際交流基金ロンドン日本語センター
大英博物館日本美術部門
デューズブルク大学東アジア研究所
ルーバンカトリック大学東アジア図書館
ハイデルベルク大学日本学研究室
チューリヒ大学東洋学部日本学科図書館
ストックホルム大学図書館
ミュンヘン大学日本学科
国際交流基金ケルン日本文化会館
ベルリン日独センター
ドイツ「恵光」日本文化センター
マールブルク大学日本研究センター図書館、マールブルク大学宗教学図書館
アラスカ大学地球物理研究所
コロンビア大学ティーチャーズカレッジ(在日機関)

国際交流基金バンコック日本文化センター
北京日本学研究中心図書資料館
中国農業大学図書館
大連理工大学図書館
北京大学図書館
武漢大学図書館
南京大学図書館
中山大学図書館
吉林大学図書館
天津図書館
中国東北大学図書館
遼寧省図書館
華東師範大学図書館
中国人民大学図書館
清華大学図書館
大連外国語学院図書電教館
厦門大学図書館
復旦大学図書館
上海交通大学図書館
翰林大学校翰林科学院日本学研究所

学術情報サービスの国際展開

◆図書館間相互貸借システム(NACSIS-ILL)

英国図書館原報提供センター(BLDSC)の相互貸借システム(ARTTel)と接続し、国内機関と同様の文献複写や現物貸借の申し込みが可能になっています。また、米国との間でも日米文化教育交流会議(カルコン)の提言を受けて、日米両国におけるドキュメント・デリバリー・サービスの改善に関するプロジェクトを実施しています。その成果として、日米の大学図書館間でのグローバルILLの運用を平成14年度から開始しています。

◆情報検索サービス(NACSIS-IR)

海外の大学・研究機関に対して、国立情報学研究所が企画・作成したデータベースを中心にサービスを行っています。

◆電子図書館サービス(NACSIS-ELS)

海外の大学・研究機関に対して電子図書館サービスの提供を行っており、我が国の学協会が発行する学術雑誌を海外からも利用することが可能となっています。

国際事業プロジェクトの展開

国立情報学研究所では、前述の「中国との学術情報交流プロジェクト」や「日米両国におけるドキュメント・デリバリー・サービスの改善に関するプロジェクト」など、海外の大学・研究機関との連携・協力により、学術情報の国際的流通に関するワークショップの開催・参加や、情報化のための国際協力や研修プログラムなど、様々な国際事業プロジェクトを実施しています。



ARL (Association of Research Libraries)における協議

研修事業

<http://www.nii.ac.jp/hrd/>

専門研修

大学等の学術研究機関において学術研究活動支援の中核的な役割を担う職員を養成するため、専門的かつ高度な知識と技術の修得を目的とした研修を実施しています。

●国立情報学研究所セミナー

実際の研究活動を体験することで学術研究支援活動の中核となる人材を養成する研修

●情報セキュリティ担当職員研修

ネットワーク・セキュリティに係る最新かつ高度な知識及び専門技術を修得する研修

●情報ネットワーク担当職員研修

機関内LAN等の構築・運用管理等に係る最新かつ高度な知識及び専門技術を修得する研修

●総合目録データベース実務研修

目録所在情報サービス参加図書館等において指導的役割を担う人材を養成する研修

●NACSIS-IRデータベース実務研修

NACSIS-IR等の情報検索サービスに関する利用説明会の企画・運営担当者を養成する研修

講習会・利用説明会

目録所在情報サービスの業務担当者を対象とした講習会や、情報検索サービスの利用者を対象とした利用説明会を開催しています。

また、受講機会の拡大を図る目的で、各大学図書館等との共催による地域講習会・利用説明会を開催しています。

講習会・利用説明会の種類は次のとおりです。

- ・目録システム講習会
- ・ILLシステム講習会
- ・NACSIS-IR利用説明会



目録システム講習会

自習システムの提供

従来の集合型の講習会とは別に、インターネットを介して自習できる環境の整備を行い、担当者の学習機会の拡大を図っています。現在、NACSIS-ILLの自習システム(NACSIS-SL/ILL)のサービスを提供しています。

大学・学会等の利用者講習への支援活動

研究所の各サービスについて、大学・学会等が独自に実施する講習会等の事業に対して、講習用資料等の提供や事業のカリキュラム相談、利用者番号の貸与等の支援活動を行っています。

国際研修

関連機関と協力して、海外の学術研究機関の研究支援職員を対象とした研修を実施しています。



中国における目録システム講習会
(北京日本学研究センター)



ドイツにおける目録システム講習会
(ケルン大学電算機センター)

評議員・運営協議員・参与・名誉教授

評議員

事業計画その他の管理運営に関する重要事項について所長に助言します。

青木 利晴	株式会社NTTデータ代表取締役社長	久保 正彰	日本学士院第一部長
安西祐一郎	慶應義塾長	熊谷 信昭	大阪大学名誉教授
池端 雪浦	東京外国語大学長	佐和 隆光	京都大学経済研究所長
石井 米雄	神田外語大学長	菅原 寛孝	高エネルギー加速器研究機構長
井口 洋夫	宇宙開発事業団宇宙環境利用研究システム長	長尾 真	京都大学長
植之原道行	多摩大学名誉教授	野依 良治	名古屋大学大学院理学研究科教授
大嶋 仁	国立学校財務センター所長	松野 陽一	国文学研究資料館長
大塚 正徳	東京医科歯科大学名誉教授	森 亘	日本医学会長
沖村 憲樹	科学技術振興事業団理事長	吉川 弘之	独立行政法人産業技術総合研究所理事長
梶原 拓	岐阜県知事	20名(五十音順)	
木村 孟	大学評価・学位授与機構長		

運営協議員

共同研究計画に関する事項その他の研究所の運営に関する重要事項で所長が必要と認めるものについて所長の諮問に応じます。

有川 節夫	九州大学副学長・附属図書館長	坂内 正夫	国立情報学研究所企画調整官(副所長)
稲垣 康善	名古屋大学大学院工学研究科教授	小野 欽司	国立情報学研究所研究総主幹
井上 如	学術情報センター名誉教授	根岸 正光	国立情報学研究所国際・研究協力部長
黒田 晴雄	東京理科大学総合研究所教授	羽鳥 光俊	国立情報学研究所開発・事業部長
高木 幹雄	東京理科大学基礎工学部教授	浅野 正一郎	国立情報学研究所情報基盤研究系研究主幹
田中 英彦	東京大学大学院情報理工学系研究科長	丸山 勝巳	国立情報学研究所ソフトウェア研究系研究主幹
田中 穂積	東京工業大学大学院情報理工学系研究科教授	山本 毅雄	国立情報学研究所情報メディア研究系研究主幹
土居 範久	慶應義塾大学理工学部教授	上野 晴樹	国立情報学研究所知能システム研究系研究主幹
六本 佳平	放送大学教授	小山 照夫	国立情報学研究所人間・社会情報研究系研究主幹
若林 克己	群馬大学名誉教授	宮澤 彰	国立情報学研究所学術研究情報研究系研究主幹
(以上五十音順)		山田 茂樹	国立情報学研究所実証研究センター長
21名			

参与

情報学に関する研究並びに学術情報の流通のための基盤の開発及び整備等に関する諸問題について所長の諮問に応じます。

天城 勲	(財)高等教育研究所理事長	福村 晃夫	中京大学特別顧問
井内慶次郎	(財)日本視聴覚教育協会会長	松田 達郎	国立極地研究所名誉教授
岡村 總吾	国際大学理事長	Edward E.David,Jr.	元米大統領科学顧問
木田 宏	(財)新国立劇場運営財団顧問	James L.Flanagan	ラトガース大学副学長
清水 司	東京家政大学長	John M.Thomas	ケンブリッジ大学教授
天満美智子	津田塾大学名誉教授	Lewis M.Branscomb	ハーバード大学名誉教授
戸張 正雄	国立国会図書館長	Lotfi A.Zadeh	カリフォルニア大学バークレイ校教授
長倉 三郎	日本学士院長	Walter L.Engl	ドイツ・アーヘン工科大学名誉教授
16名(五十音順)			

名誉教授(学術情報センター)

大野 公男	北海道情報大学長	山田 尚勇	東京大学名誉教授
市川 惇信	東京工業大学名誉教授	井上 如	元学術情報センター副所長
西田 龍雄	京都大学名誉教授		

名誉教授(国立情報学研究所)

佐和 隆光	京都大学経済研究所長	内藤 衛亮	東洋大学社会学部教授
-------	------------	-------	------------

組織／予算・定員

所 長

末松 安晴

参与会
評議員会

企画調整官(副所長)

坂内 正夫(教授・併任)

運営協議員会

研究総主幹

小野 欽司(教授・併任)

■ 科学研究費補助金(平成13年度)

研究種目	件数	交付決定額(千円)
基盤研究(A)(1)	1	9,600
基盤研究(B)(1)	1	2,500
基盤研究(A)(2)	2	12,000
基盤研究(B)(2)	6	27,900
基盤研究(C)(2)	8	8,700
萌芽的研究	1	800
奨励研究(A)	13	13,700
特定領域研究(C)(2)	10	79,200
特別研究員奨励費	1	700
研究成果公開促進費	5	114,900
計	48	270,000

■ 産学連携(平成13年度)

	件数	受入決定額(千円)
民間等との共同研究	8	計 14,225
受託研究	7	計 11,823
奨学寄附金	33	計 51,978

■ 定員(平成14年度)

所 長	企画調整官 (副所長)	教授	助教授	助手	小計	事務系	合計
1	1	34 ② (11)	32 (10)	17	85 ② (21)	76	161 ② (21)

○書は外国人客員で内数、()書は客員分で外数

上段：定員 中段：外国人客員 下段：客員

■ 各種研究員等の受入数(平成13年度)

区 分	人 数
外国人研究員	3
受託研究員	0
非常勤研究員(COE)	6
リサーチ・アシスタント(RA)	8
科学研究支援員	3
産学連携研究員	1
日本学術振興会特別研究員	0
日本学術振興会外国人特別研究員	1
日本学術振興会外国人招へい研究者	1
計	23

■ 歳入決算額(平成13年度) (単位:千円)

産学連携等研究収入	32,527
雑収入	61,491

■ 歳出決算額(平成13年度)

(単位:千円)

区分	人件費	物件費	産学連携等研究費	施設整備費	計
国立学校特別会計	1,214,919	8,633,751	32,181	78,857	9,959,708
一般会計	—	6,820	—	—	6,820

開発・事業部

部長：羽鳥 光俊(教授・併任)
次長：大埜 浩一

管 理 部

部長：千葉 秀夫

国際・研究協力部

部長：根岸 正光(教授・併任)

		教 授	助教授	助 手
◆は流動研究部門 ※は客員研究部門	情報学基礎研究系	龍 田 真	宇 野 毅 明	照 井 一 成
	研究主幹：藤山 秋佐夫 (教授・併任)	遠 水 謙	新 井 紀 子	奈 良 高 明
情報学基礎研究系	情報数理研究部門	佐 藤 健	Nigel Henry Collier	兼 岩 憲
	記号科学研究部門		村田 剛志・古山 宣洋	
情報基盤研究系	認知科学研究部門			
	量子コンピューティング研究部門			
情報基盤研究系	計算理論研究部門◆	日 比 野 靖	鈴 木 正 人	
	生命情報科学研究部門※	菅 原 秀 明	渡 邊 日 出 海	
情報基盤研究系	計算機アーキテクチャ研究部門	米 田 友 洋	松 本 尚	
	ネットワークアーキテクチャ研究部門	浅 野 正 一 郎		藤 野 貴 之・児 玉 和 也
ソフトウェア研究系	高機能ネットワーク研究部門	山 田 茂 樹	松 方 純	
	情報流通基盤研究部門	小 野 欽 司	相 澤 彰 子	
ソフトウェア研究系	暗号情報研究部門			
	ネットワークセキュリティ研究部門※	長 谷 川 亨	米 田 進	
ソフトウェア研究系	プログラミング言語研究部門	高 野 明 彦	佐 藤 一 郎	細 部 博 史
	ソフトウェア工学研究部門	濱 田 喬	佐 藤 真 一	孟 洋
情報メディア研究系	データ工学研究部門		計 宇 生・高 須 淳 宏	相 原 健 郎
	分散統合処理研究部門	丸 山 勝 巳	Frederic Andres	井 手 一 郎
情報メディア研究系	システムソフトウェア研究部門◆	井 宮 淳	渡 部 卓 雄	
	高信頼ソフトウェア研究部門※	松 岡 聡	加 藤 和 彦	
知能システム研究系	大規模ソフトウェア研究部門※	米 澤 明 憲	吉 川 正 俊	
	画像情報処理研究部門	羽 鳥 光 俊	趙 偉 平	
知能システム研究系	統合メディア処理研究部門	橋 爪 宏 達		上 岡 英 史
	情報検索研究部門	山 本 毅 雄	片 山 紀 生	
人間・社会情報研究系	コンピュータビジョン研究部門※	神 内 俊 郎	中 村 裕 一	
	知識処理研究部門	本 位 田 真 一	武 田 英 明	市 瀬 龍 太 郎
人間・社会情報研究系	計算知能研究部門	山 田 誠 二	佐 藤 寛 子	
	人間機械協調研究部門	上 野 晴 樹	杉 本 晃 宏	井 上 智 雄
学術研究情報研究系	ロボティクス研究部門※	白 井 良 明	武 藤 伸 洋	
	情報管理学研究部門		影 浦 峯	竹 内 孔 一
学術研究情報研究系	情報利用学研究部門	小 山 照 夫	後 藤 田 洋 伸	植 木 浩 一 郎
	情報図書館学研究部門		神 門 典 子	江 口 浩 二・辻 慶 太
実証研究センター	情報制度論研究部門		岡 田 仁 志	
	人文社会系研究情報研究部門	根 岸 正 光	柴 山 盛 生	
情報学資源研究センター	理工系研究情報研究部門		矢 野 正 晴	
	生物系研究情報研究部門	藤 山 秋 佐 夫	孫 媛	
情報学資源研究センター	実証研究推進室	宮 澤 彰	阿 部 俊 二	北 本 朝 展
	共同研究企画推進室	大 山 敬 三	西 澤 正 己	日 高 宗 一 郎
情報学資源研究センター	超高速ネットワーク研究室※	Henri Angelino・安 田 靖 彦	漆 谷 重 雄	
	高品質ネットワーク研究室※	川 原 崎 雅 敏	瀬 崎 薫	
情報学資源研究センター	フルテキストコンテンツ研究室※	五 神 真	浦 本 直 彦	
	バーチャルライブラリ研究室※	山 本 喜 久		
企画調整課	資源構築利用推進室	安 達 淳		加 藤 弘 之
	データコレクション研究室※	Philippe Codognet・村 上 征 勝	岸 田 和 明	
企画調整課	企画調整係			
	情報基盤整備係			
ネットワークシステム課	共同利用係			
	ネットワーク開発企画係			
コンテンツ課	ネットワーク整備運用係			
	ネットワークセキュリティ係			
アプリケーション課	コンテンツ形成管理係			
	文字情報係			
総務課	画像コンテンツ係			
	計量情報係			
会計課	システム開発管理係			
	データ処理技術係			
研究協力課	ネットワークソフトウェア技術係			
	総務係			
広報調査課	企画法規係			
	人事係			
成果普及課	総務・監査係			
	司計・管財係			
研究成果普及推進室	経理係			
	用度第一係			
研究成果普及推進室	用度第二係			
	施設係			
研究成果普及推進室	研究協力係			
	国際交流係			
研究成果普及推進室	大学院係			
	広報調査係			
研究成果普及推進室	情報資料係			
	国際事業係			
研究成果普及推進室	企画調査係			
	成果普及係			
研究成果普及推進室	専門研修係			

施設

学術総合センター（東京都千代田区）

学術総合センターは、我が国の学術研究基盤の充実強化を図るため、情報学等の研究、学術の交流、学術情報の発信、社会との連携の拠点施設として建設され、平成11年12月に竣工しました。高層棟は、国立情報学研究所をはじめ、一橋大学大学院国際企業戦略研究科、国立学校財務センター（一部）、大学評価・学位授与機構（一部）の4機関が入居し、各機関が有する学術に関する諸機能を総合的に発揮することにより、高度の知的創造拠点の形成を目指しています。また、低層棟は、一橋記念講堂などの会議施設となってお

り、国立大学等による国際会議や学会、講演会等に幅広く対応しています。



一橋記念講堂

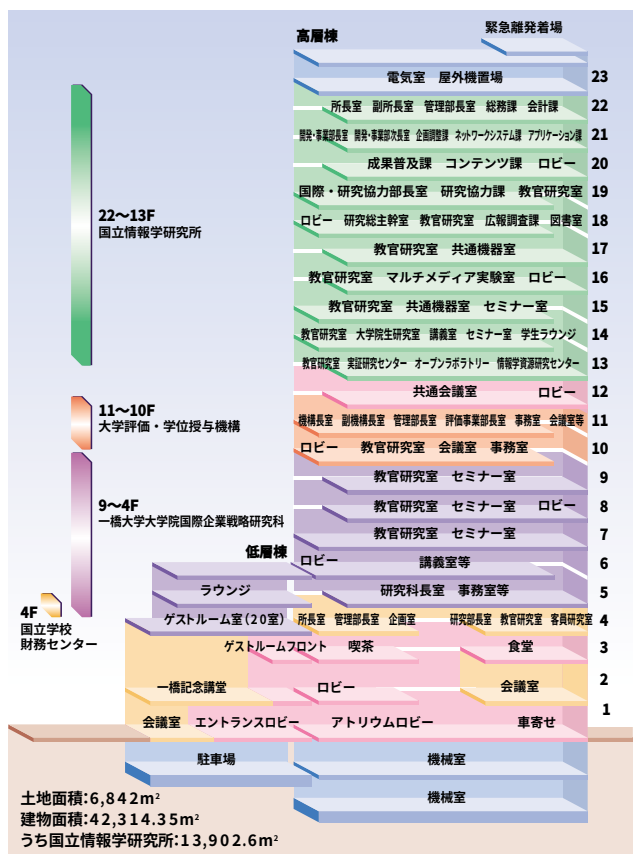
図書室

情報学分野の内外の学術雑誌を中心に、図書・雑誌等の資料を収集しており、情報学の専門図書室として整備を進めています。



蔵書冊数・雑誌タイトル数

資料種別	図書(冊)	雑誌(冊)	雑誌(タイトル数)
国内資料	11,360	13,251	188
国外資料	7,069	9,617	218
計	18,429	22,868	406



千葉分館（千葉市稲毛区）

学術情報システムの運用や各種学術情報サービスの提供を行う計算機システム及び学術情報ネットワーク関連の機器類を配置する電子計算機棟として、東京大学生産技術研究所千葉実験所の敷地内に建設され、平成6年11月に竣工しました。



千葉分館案内図



土地面積（借用分）	1,782m ²
建物面積	3,715m ²

国際高等セミナーハウス（長野県軽井沢町）

国際的な研究交流の場として、長野県軽井沢町に建設され、平成9年3月に竣工しました。国際会議、各種セミナー、研修等に使用することを目的として、セミナー室（46人収容）や宿泊室等を設けており、国立情報学研究所はもとより、大学共同利用機関の施設として、広く大学等の利用に供しています。



国際高等セミナーハウスにおけるセミナー

国際高等セミナーハウス 案内図



国道18号線軽井沢警察署横のオーバースタックをご利用下さい。

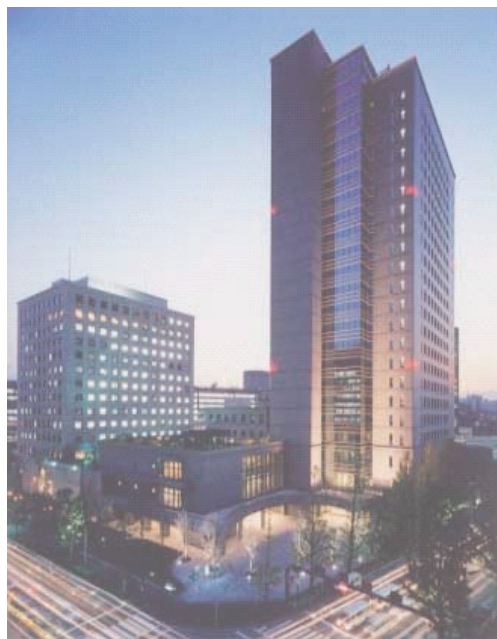
土地面積	3,339m ²
建物面積	667m ²

昭和48年(1973年) 10月	学術審議会第3次答申(学術振興に関する当面の基本的施策)において、基本的政策として、「学術情報の流通体制の改善について」提言
昭和51年(1976年) 5月	東京大学情報図書館学研究センター発足
昭和53年(1978年) 11月	文部大臣から学術審議会に対し「今後における学術情報システムの在り方について」諮問があり、昭和55年(1980年) 1月に答申
昭和58年(1983年) 4月	東京大学文献情報センターの設置(情報図書館学研究センターを改組)
昭和59年(1984年) 12月	目録所在情報サービス開始
昭和61年(1986年) 4月	学術情報センターの設置(東京大学文献情報センターを改組)
昭和62年(1987年) 4月	学術情報ネットワークの運用及び情報検索サービス開始
昭和63年(1988年) 4月	電子メールサービス開始
平成 元年(1989年) 1月	学術情報ネットワークの米国との国際接続(全米科学財団: NSF)
平成 2 年(1990年) 1月	学術情報ネットワークの英国との国際接続(英国図書館: BL)
平成 4 年(1992年) 4月	図書館間相互貸借(ILL: Inter-Library Loan)システムの運用開始 インターネット・バックボーン(SINET)の運用開始
平成 5 年(1993年) 11月	日本科学技術情報センターとゲートウェイによるデータベースの相互利用開始
平成 6 年(1994年) 4月	英国図書館原報提供センター(BLDSC)とのILL接続サービス開始
平成 7 年(1995年) 10月	学術情報ネットワークのタイ王国との国際接続
平成 8 年(1996年) 4月	国立国会図書館とのILL接続サービス開始
平成 9 年(1997年) 3月	国際高等セミナーハウス(長野県軽井沢町) 竣工
4月	電子図書館サービス開始
平成12年(2000年) 2月	学術総合センター(東京都千代田区一ツ橋) 内に移転

平成 9 年(1997年) 12月	文部省、情報分野における中核的な学術研究機関の在り方に関する調査協力者会議を設置
平成10年(1998年) 1月	学術審議会において「情報学研究の推進方策について」建議、情報研究の中核的な研究機関を大学共同利用機関として設置することを提言
3月	情報分野における中核的な学術研究機関の在り方に関する調査協力者会議、報告書を提出
平成10年(1998年) 4月	情報研究の中核的研究機関準備調査室が設置され、5月に委員会が発足
平成11年(1999年) 3月	情報研究の中核的研究機関準備調査委員会、報告を提出
4月	情報研究の中核的研究機関創設準備室が設置され、5月に準備委員会が発足
7月	情報研究の中核的研究機関創設準備委員会、中間まとめ提出
平成12年(2000年) 3月	情報研究の中核的研究機関創設準備委員会、報告書提出

平成12年(2000年) 4月	国立情報学研究所の設置(学術情報センターを廃止・転換)
平成14年(2002年) 1月	スーパー SINETの運用開始
4月	大学院情報学専攻の設置 GeNii(NII学術コンテンツ・ポータル)の公開開始

問い合わせ先



■ 国立情報学研究所全般に関すること

TEL 03-4212-2000 (代表)

■ 情報公開に関すること

TEL 03-4212-2020,2021 FAX 03-4212-2035 総務課 企画法規係

■ 広報に関すること

TEL 03-4212-2132 FAX 03-4212-2150 広報調査課

E-mail:kouhou@nii.ac.jp

■ 大学院情報学専攻に関すること

TEL 03-4212-2105 FAX 03-4212-2120 研究協力課 研究協力係

E-mail:kenkyou@nii.ac.jp

■ 研究協力に関すること

TEL 03-4212-2105 FAX 03-4212-2120 研究協力課 研究協力係

E-mail:kenkyou@nii.ac.jp

■ 国際交流に関すること

TEL 03-4212-2110 FAX 03-4212-2120 研究協力課 国際交流係

E-mail:kenkyou@nii.ac.jp

■ 学術情報ネットワークに関すること

TEL 03-4212-2255 FAX 03-4212-2270 ネットワークシステム課 ネットワーク開発企画係

E-mail:net6@sinet.ad.jp

■ 各種情報サービスの利用申請に関すること

TEL 03-4212-2225 FAX 03-4212-2230 企画調整課 共同利用係

E-mail:user-request@nii.ac.jp

■ 目録所在情報サービス (NACSIS-CAT/ILL)

図書目録に関すること

TEL 03-4212-2355 FAX 03-4212-2375 コンテンツ課 コンテンツ形成管理係

E-mail:catadm@nii.ac.jp

雑誌目録に関すること

TEL 03-4212-2360 FAX 03-4212-2375 コンテンツ課 文字情報係

E-mail:catadm@nii.ac.jp

ILLに関すること

TEL 03-4212-2365 FAX 03-4212-2375 コンテンツ課 計量情報係

E-mail:illadm@nii.ac.jp

■ 情報検索サービス (使い方・内容) に関すること

TEL 03-4212-2305 FAX 03-4212-2330 アプリケーション課 システム開発管理係

E-mail:irhelp@nii.ac.jp

■ 電子図書館サービス (使い方・内容) に関すること

TEL 03-4212-2315 FAX 03-4212-2375 コンテンツ課 画像コンテンツ係

E-mail:els@nii.ac.jp

■ NII学術コンテンツ・ポータルに関すること

TEL 03-4212-2320 FAX 03-4212-2330 アプリケーション課 ネットワークソフトウェア技術係

E-mail:geniadm@nii.ac.jp

■ 学協会情報発信サービスに関すること

TEL 03-4212-2216 FAX 03-4212-2230 企画調整課 企画調整係

E-mail:wwwsoc@nii.ac.jp

■ 成果普及・教育・研修に関すること

TEL 03-4212-2165 FAX 03-4212-2180 成果普及課 企画調査係

E-mail:edu@nii.ac.jp

国立情報学研究所ホームページ
<http://www.nii.ac.jp/index-j.html>



NII

国立情報学研究所

National Institute of Informatics

URL <http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2丁目1番2号 学術総合センター

千葉分館

Chiba Annex

〒263-0022 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-8

TEL.043-285-4911 (代表)

国際高等セミナーハウス

International Seminar House for Advanced Studies

Inose Lodge

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢字長倉往還南原1052-471

TEL.0267-41-1083

